
夕闇の彼方へ

犬公

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕闇の彼方へ

【Nコード】

N1580A

【作者名】

犬公

【あらすじ】

《若者二人がまだ見ぬ世界に冒険へ》……という『在りきたりR PG（感覚）』を描く！

第一話：船

「なんだそれ？」

澄んだ瞳がまるで子どものような、アジズは尋ねた。

髪は全体的に赤っぽく、後ろ髪は外にはねている。なかなかの男前だ。

一方の返答者は考え込んでいた。

暗い青のかかった髪が風になびいている。

女だろうかと思うほど、美しい顔立ちをしている。

彼はやっとアジズでも理解できるような言葉をさがし出して言った。

「海の上をスイスイ進める乗り物ってトコかな。」

「はあ？ シリル、何言ってるんだよ。海は、もぐることはできても、上に立つことはできねえだろ？」

すかさずアジズは言い返した。

アジズの経験上、シリルの言うことはトンちんカンだった。

「まあ見てろって。」

シリルは早速、その乗り物に乗り込み、何かし始めた。

アジズは浜辺にぼつんと置かれてある、シリルの言うところの『船』というものに注目した。

「……よし！準備オツケーだ。」

シリルはそう言うのと船から出てきた。

「さあ、僕の発明の真価が問われるときがきた。これで成功すれば、『魔法学』をさらに様々な分野に応用できる可能性が膨らむ。……」

アジズ、今からこいつを押すぞ。海の上に浮かべるんだ。」

アジズはなんだか楽しくなってきた。

早速、二人は船を力いっぱい後方から押し始めた。

船は湿った浜とすれて、ずるずると音をたてながらゆっくり前へ前へと進んでいった。そして、遂に……。

「浮かんでる！！」

アジズはびつくりした表情で——半分嬉しそうに——言った。船は見事に浮かんでいる。

シリルは船に乗り込んで言った。

「アジズ、乗れよ。ここからが大事なんだ。」

第二話：決意

二人は、シリルの家にいた。

昼間の『船』の実験は上手くいった。

船はスイスイと海の上を進んだのだ。

これについて、シリルは言った。

「あの船を動かす原動力がこの石だ。ただの石ころに僕が魔法をかけたんだ。」

「おい、いつから魔法なんか使えるようになったんだよ。」

「待てつて。この世に魔法なんていう便利過ぎるものがある訳ないだろ？ 僕の言う魔法は『魔法学』の本の中で魔法と呼ばれていたもののことだよ。」

「……なんだか意味不明だな。」

アジズは混乱しかけていたが、シリルは続ける。

「この本はかなり昔に書かれていて、まずは文字の解読からしなきゃならなかったんだ。」

解読には一年もかからなかったな。

この本はきつと、世界に一冊、僕だけのものである訳だ。

最大の図書館『ピッツバーキング』で、文字が訳不明で今にも捨てられそうだったこの本に出会えたのは運命だろうか。うんうん……。

「シリルは『魔法学』の本のことに話が流れているのに気付いていなかった。それはアジズもだった。」

「そんな小さな文字ばっか見てるから、眼鏡かけないといけなくなるんだよ。」

アジズは極度の遠視だった。ある意味、アジズも眼鏡が必要である……。

「……いつの間にか話が逸れていたみたいだ。」

アジズ、この石には加工が施されているんだ。ほら、こんな具合さ。

「石はちょうど、中身がくり抜かれて、箱のようになっていた。どのようにしてつくったのかは分らないが、石の厚みは薄く、容積は大きい。」

「……じゃあ、例えばコレだ。コレも『魔法学』を参考にしてつくったんだが、『電気灯』というものだ。ほらっ、この通り。」

「わあ！……って、どうなってんだ！？」

部屋は、あっという間に昼間の時刻に戻ってしまった。

「おっと、すまない。ゴホンッ。え……だからな、この電気灯は『電気力』によって光るんだ。僕たちは明かりには火を使っているだろ？」

シリルは他にもいろいろと話したようだが、アジズにはさっぱり理解できなかった。

恐らく、世界の誰もが、シリルの言うことに驚きを隠しきれないだろう。

「まあ、船を動かすには多くの電気力が必要な訳だ。しかし、僕は『魔法学』を越えたんだ。電気力は蓄えることができたのさ。」

「おい、なんだよシリル。お前、すげえモンつくったんじゃねえのか！？」 アジズは、ソファで横になってシリルの話を聞いていたが、この時ばかりは起き上がって、きちんと座り直した。

二人は、長い間のつき合いなので、お互い自由気ままに接し合っている。

ただ、人の話を横になって聞くのはどうかと思われるかも知れないが、実は、シリルは、心を見抜いてしまいそうなアジズの清らかな目が苦手であった。

夜にこうやって話をするときは、ソファにいつも横になって、気持ちよさそうにしているアジズに向かって、別段、気にすることなく、話を持ち出すのだ。

アジズは天上を眺めたり、チラッと横目でシリルを時々見たりして話を聞くのだった。

「なあ、アジズ……、そのだなあ……。」

シリルはアジズの純粋な眼差しを背中でするようにした。そして続けた。

「僕は、船で海の方こう側に行ってみようと思ってるんだ。」

アジズはシリルの背中しか見れなかった。しかし、十分にその意志が伝わってきた。今のシリルの目は本気だろう。

「海の方こうなんて、誰も考えたことないだろう！？まして生きて帰って来れるのかよ！どうなんだ？」

アジズは本当の友だから言える口調で尋ねた。

「……分からない。」

「だろ！？……まあ、お前が本当に行く気なら止めねえけどなっ。オレもついて行くよ。」

シリルは戸惑っていた。

アジズと一緒に来てくれたら、どんなに心強いことか……。嬉しさのあまり、心が痛んだ。

「だけどアジズ、僕のやろうとしていることは多分、無意味に終わるだろう。」

「……一緒に死ぬな！」

僕は新たな世界への好奇心を満たすために、自らの命を犠牲にするんだ。

たとえば僕が、海の方こうで何かを見たとしても、それを誰かに伝えることはできないだろう。

得體も知れない距離を往復できるような電気力は、まず無いだろうからな……。」

シリルは素直になれなかった。アジズと共に旅に出て、答えを見つけて生きて帰ってくる。

これがベストだった。

だが、実際、そういう良い結果ばかり、いつも起こってくれるはずがない。

……決まり文句である。

「無意味じゃねえよ！」

アジズはシリルの思考を遮るように叫んだ。

「この世に無意味なことなんかねえだろ？」

シリルはいつもアジズのことを尊敬していた。

確かに、頭も悪いし、きちんとした礼儀作法もよく分かってないし、教養のかけらもない。

——ただ、勘は鋭くて、運動神経は抜群にいい。

自分とはまるで正反対なアジズだが、一緒にいると勇気がわいてくる。

自分は、読書や研究のためだと言って、家にこもってばかり、外のことはあまり知らない。

よく知っている、といったら、ピッツバーキング図書館までの道のりぐらいだろうか。

アジズはどうだろう？

多分、同じ図書館へ行くのに、たくさんのわき道を知っているだろう。彼は外で自分とは違うものを学んでいたんだ！

シリルは外の世界に興味を抱いていた。

しかし、今回の船旅はスケールが半端ではなかった。アジズも知らない新世界への旅だった。

「わかったよ。」

シリルは呆れたような声で言って、アジズに振り返った。

「今夜は遅いから泊まっていけ。」

彼の顔は穏やかだった。

アジズは、このセリフを何回聞いたことだろうなあといいながら、笑って言った。

「ったくー。寂しがり家なんだから。」

第三話：親父

シリルの家は借り家だった。

シリルは家主のピーターさんに、当分の間留守にすることを告げた。当分と言っても、帰って来れるかどうか分からない。

いっそのこと、借り家から出て、誰かに明け渡した方がいいように思えた。

しかし、シリルが何年間も費やして集めた資料や本、それに実験器具といった大量のお荷物が行き場を失ってしまうのだ。

シリルはピッツバーキング図書館で働きながら稼いできた全財産をピーターさんにメモ書きして置いていくことにした。

「どうせ旅には使えそうにないしな。きつと……。」

ちよっぴり寂しそうにも見えたが、気のせいのようなのだ。

アジズは朝一番、自分の家に旅のことを告げに帰った。

海辺の道はまだ少し薄暗かったが、家に着いたときには、いつものように鳥の声が聞こえ始めた。アジズが家に帰ってくるのは久しぶりのことであつたので、親父は、皺を緩めて心から迎えてくれた。

いつも叱られっぱなしだったアジズだから、親父の笑顔を見ると嬉しくなつた。

どう話を切り出そうかと考えていると、親父の方が先にこう切り出した。

「何か言いたいこともあるんだろう？ そんな目して……。」

アジズは心の中に、細かい、しかし重い『何か』があふれ出てくるのが分かった。

少し開いた口はそのまま動かなくなつた。

……自分は親父に寂しい思いをさせてしまったようだ。

アジズは十歳のときに家を出ていった。

そして、それからと言うもの、狩りをして生計を立て、野宿するか、もしくはシリルの家に泊めてもらつかして暮らしていた。

原始的、野性的と言えようか、アジズは責任という重圧を避けてここまで来た。

「親父……、オレ……。」

アジズは何となく涙を目にためていた。子供のときのように、叱られた訳でもないのに。気持ちとは分らないものだ。本当に何となく涙が目潤す。心の整理もつかず、複雑にからみあった感情は、アジズを支配して離さない。

「なんだ、言ってみろ。そんなに泣くほど悲しい知らせか？俺はもう、母さんが死んだときのあの気持ちを知ってるんだ。どんなに辛いことだって耐えられると思ってる。ほら、アジズ。俺の知ってるお前なら、人を辛くさせることが得意なはずだぞ？」

アジズは辛かった。

そういえば、母さんにもかなり迷惑かけたなあ……、なんて思い起こす余裕は持ち合わせてなかった。アジズは、今ここに自分がいるということが不思議でたまらなくなっていた。

確かに、アジズの過去は散々だった。

しかし、家を出てからというもの、一人幼くも生活しているシリルと出会い、アジズは友の温かさを知った。

もし、これがシリルでなかったら、随分変わっていただろうが。

ただ、アジズが劇的に変わった訳ではない。

根本的なところは、生まれから恐らく死ぬまで変わらないし、変えることもできないだろう。

アジズの場合、核となる部分が誰に劣らず純粹で、付属として多くの問題の種を持っていた。

なぜ、花が咲くまで、その種に水をやり続けてしまったのかは以前のアジズに聞くしかない。

重要なのは、不滅の花など『ない』ということ。

必ず枯れ、新たな種を残して去る。

その種のひとつが発芽して、再び花を咲かせるようなことになれば、アジズは人の心も知らず、自由奔放に振る舞い始めるだろう。

今のアジズは、過去とは縁の切れない存在ながら、未来に向かって成長している。

「……親父、オレ、もう二度と生きて親父に会えないかも知れない。」

「……それで？」

アジズは促されるがままに続けた。

「だから、その……、許してもらおうと思って。」

アジズは上手く全てを伝えられずにいたが、用件を伝えることに成功した。

「ばか。俺が許す許さないを決めたところで、何も意味がないだろう。」

「全く意味が無い訳ないよ！！親父がもし許してくれたら、オレは快く旅に出られるし、許さないって言ったときには、また何か考えるだろうし……。だから……！」

「旅に出るのか……。」

アジズが全て言い終える前に、親父はつぶやいた。

「お前が二度と生きて帰れないって言うほど、危険な旅なのか？」

「うん、多分……。でも分からない。海の向こうを目指して旅するんだから、誰も先のことは分からない……。」

この言葉は、親父からしては爆弾発言だった。

「海の向こうだって!？」

「う、うん……。」

親父は、本当に幼かったころのアジズの目を思い起こさせる、純粹な、今、目の前にいるアジズの目を見た。

こんな目を見たのは久しぶりだ。

アジズもいつの間にか成長していくものだなあと、親父は少し嬉しかった。

「詳しいことを聞いてみたいが、もういいだろう。行くなら行けっ。」

親父の顔はなぜか優しくなった。

「……本当にいいの？」

「ああ。俺以外の誰かで、許すような奴はおらんだろう。それだけおかしい話ってことだ。海に向こうなんて考えたこともなかった。まあ、お前は挑戦したいようだしな。どうやって海を越えるかは気になるところだが……。」

アジズは説明しようと思ったが、なかなか言葉が出てこない。

一応のところまでは説明できたので、親父も納得はしていた。

「んじゃ、行ってくる。」

「おう、気をつけてな。」

普通ならこんな会話は出来ないだろうが、不思議なものだ。

アジズが単純なだけに、親父も単純なのだろう。

第四話：出航

旅立ちは夕刻時に決まった。

シリルが言うには、『バーク・ド・ラグフ』という凶暴な白ザメは、朝から昼過ぎを主にエサ取りの時間帯にしているそうだからである。巨大なだけに、人も襲うと聞く。

シリルは『船』の電気力量がMAXになるよう調整した。

「よし、いい感じだ。」

シリルは船と同様、ご機嫌だ。

まだ出発には早かったのもあって、シリルは再びリュックサックの中を確認し始めた。

……やっぱり本を持って行こう。

シリルは一冊の本を厳選し、シリル専用コートの大きな六つの『ポケット』のひとつに一冊まるごと収納した。

アジズの方はと言うと、と言っても、何をしているのだろう。

空を眺めているようにも見てる。一番これがふさわしいだろうか。

「あの雲、どこから来たんだろうな。」

海の方こうに見えるやつが家族だとしたら、ちよつとした散歩で、こつちまで遊びに来たんだな。ったく、いいよなあ。」

アジズは何かうらやましがっているようだが、そんなアジズを見つけたシリルも、何かうらやましそうにアジズを見ている。

そろそろ太陽が夕日に化ける時刻だった。

「アジズ、ちよつといいか？」

シリルは、のんびりしているアジズに、照れ臭そうに話しかけた。アジズは、夕日に染まる海辺を見ながら、耳だけを傾けた。

「ありがとうな……。」

シリルはそう一言、つぶやくように小声で言った。

アジズはじっと、不規則に光る海の波を見ながら答えた。

「どういたしまして、なんて言えるか？」

アジズは一度もシリルの方に振り向かなかつた。

「旅が終わってからにしろよ。」

シリルはこの一言に、アジズの決意を感じた。

「……ああ、そうさせてもらうよ。」

シリルはもうアジズの調子には慣れっこだった。

アジズは時々、言葉の選択を誤り、シリルを傷付けることがあった。しかし、アジズの思いやりの表現である『痛い言葉』の裏、もしくは中には、アジズの優しい想いがある。

これに気付けない人なら誰でもアジズを嫌うことができる。逆に、気付いた人にとっては、アジズを遠ざけるなど容易なことではないのだ。

「夕日がきれいだな。」

アジズは、出発を目前としても、やはりアジズだった。

二人は夕日を見つめる。

どう描けば、こんな夕焼け色を表現できるだろうか。

こう見ると、空も海も広いものだ。

アジズたちが、村が、森が、ちっぽけに感じられる。

二人が暮らしている“世界”は案外狭すぎた。

もう少し広くてもいいだと、誰も言葉にして訴えはしないが、未知の“世界”を切り開こうとすることは、誰もがやっていること。

この世界の創造主はきっと、世界を広くつくり過ぎたのだ。どうすればすべての“世界”を得られるというのだ。

「さあ、そろそろ冒険に出るとしよう。」

シリルは言った。

「ぼうけん？」

アジズは分からない単語に対して、いつも通りの反応をした。

「『旅』は分かって、『冒険』は分からないのか？……そうだなあ、僕たちが今から始めようとしている旅が、ある意味冒険かな。……あまり説明になってないか？」

アジズは感覚で『冒険』を理解しようとした。

冒険に出る前のこの気持ちと重ねて、その言葉に偉大さを感じているようだ。

「すげえな、冒険つて。」

「本当に分かって言ってるのか？……ったく、お前っていう奴は……。」

シリルは肩をすくめて苦笑いするようにしたが、これはシリルの癖で、内心嬉しいような、何かほっとしているようだ。

いつの間にか、夕焼け空は青紫色を帯びてきて、夕闇が辺りを覆い尽くした。

二人は、短いか長いか分からないが、旅に、冒険に出る。

夕闇が支配する、二人が狭いながら暮らした“世界”を離れて。とうとう船が動き出す。

もう後戻りできないことなどないのに。

船は夕闇から逃げるように真っすぐ進んでいく。

夕闇の向こうに新たな“世界”を求めて。

第五話：大陸

月明かりの下、一隻の『船』が静かに漂っている。

その狭い操縦席に誰かいるようだ。

眼鏡と一冊の本が側の棚の上に置かれている。『世界創造論』という本のような。夜の青い闇の色をした髪と瞳は、空間に溶け込んでいるが、整った顔は逆に、星たちの光もそこに集まったかのように、明るく照らされている。

この女、いや、男は、一睡もせず、船の梶をとっているようだ。

一応のところ、『世界創造論』の知識をもとに、向かう方角を決めていたのだが、何せ、一定の方向を示す道具がない。唯一決め手となるのが太陽という具合だ。

彼は、独自の観察により、と言っても、昔の賢人の著書を参考にしているのだが、星によっても方角を定められないかと見込みをつけていた。

残念ながら、未だに解明はできていないが、一力所、一年を通してほとんど動かない星を見つけることに成功していた。彼は、昔の文献から引用して、——この文献も、彼の解読精神から単語単位で翻訳したものだ——『スタザクシス』と名付けた。

この世には多くの『知恵本』が存在するが、そのほとんどは、書かれている文字の解読ができずに保管されるだけである。

彼の手にかかれば、……とまあ、これは言うまでもないが。

前日の観察で見つけておいた、例の星『スタザクシス』が船の右手に位置するように保ちながら進む。

こう決めておくことで、この船の操縦師の目指そうとしている方角が、いつも前方に見えた。

それでもまあ、今晚の星は何だか、不思議と信用に欠ける。

そこに、もう一人の青年が眠たそうな顔をして入ってきた。

「……ほへ？ シリル、まだ起きてんのか？ いい加減寝た方がいい

いんじゃないのか？」

シリルと呼ばれる男は答えた。

「大丈夫だ。……もう少しで夜も明ける。この海域に『バーグ・ドラグフ』がいるのかは分からないが……、夜が明けてくれれば、はっきりと方角に自信が持てるし、僕も楽だ」

「ん？　そういえば、太陽って昇ってきてくれんのかなあ？　オレたち、変なトコに向かってる訳だし、もしかしたら……」

「それは多分大丈夫だ。……僕の理論が正しければの話だが……。とにかく、アジズは寝とくんだな。朝は来る。僕が起こしてやるよ」
アジズと呼ばれる青年は素直に頷いて、狭い寢所へと戻った。

（ふう、アジズ……、きつとお前は聞いてくれると思うが、僕の理論は、誰にも見向きもされない、異例な発想なんだ。

これが立証されるまでは、お前は普通の考え方を持っていればいいんだよ……）

シリルは心の中で、アジズを説得した。

（さあ、朝よ来い！　僕たちに、希望の光を届けてくれ！）

「アジズ、アジズ、朝だぞ」

「……ふあ？　あさ？」

アジズが起こされたときにはもう、日が、少し見上げたところにあった。

「なっ、言っただろ？」

シリルは優しく微笑んだ。

アジズは一面の海を見渡した。そして、空を。

「シリル……、オレたちの世界って、広いんだな」

アジズはしみじみと言った。

「まあな……、思った以上に広いことは確かだな」

シリルは疲れているだろうに。

でも、アジズにそんな顔ひとつ見せないし、言葉に余計な重みを感じ

じさせない。

そして遂に、この瞬間がやってきた。——それは、二人が待ち望んでいた。

「あれ？ おい見るよっ、シリル！」

アジズは、遠く前方の雨雲——のような灰色の煙雲——を指した。
「ああ、あれがどうした？」

「よく見るよ、下の方、下の方！ 島だよ！」

アジズの視力が、微かに見える『島』をとらえた。シリルにはぼやけて見えないが……。

「本当か！？ よしっ、このまま直進しよう！」

シリルにスイッチが入った。

（やはり、あるんだな？ 僕の思った通り……、別の大陸が！！）
近づいてみると、小島ではなく、本当に『大陸』だった。奥には険しい山脈も見える。

二人が気がかりなのは、目の前に見える街らしき建造物の集団から、煙がモコモコと吹き出ていることだ。

正面からはやはり、恐いので、脇に見える森——と言っても、枯れ果てた、葉のない森だが——の近くの岸に船をよせ、上陸することにした。

第六話：女の子

二人は森の中を探索しながら歩いた。

この森は鳥の声も聞こえず、ひっそりとしていた。

それに、二人が真つ先に気付くことは、空気がとても悪いらしく、息が苦しいということだ。

「……だいぶ荒れてるみたいだが……。ゴホツゴホツ。……それより、かなり空気が悪いな、ここは」

シリルは口もとを手でおさえている。

「何か悲しくならねえか？」

アジズは、側にある一本の傷付いた、スカスカな樹木の幹に手を当てながら言った。

シリルも真剣な面持ちだった。

「何が原因が分からないな……」。

全体的に被害を与えているようだから、何か自然現象が要因だろう」
シリルはいつもの考察力で状況を大体把握していた。

「ちよつと、シリルっ」

アジズが、目でシリルに『何か聞こえる』ということを伝えた。
確かに聞こえる。この音は……。

（せき……咳だー!!）

シリルはさらに辺りを見渡した。

（どこかに人がいるのか？）

一方のアジズもシリルと同様、その音が、人の『咳』であると知覚し、音源を探し始めた。

こういうのには強いアジズだ。狩りで慣れている。一步一步、近づいているようだ。

アジズは場所を特定すると、シリルにまたもや目で知らせた。

二人は、太い根の下にすっぽりとあいた、ちよつと低くなっている場所に目をやった。

「女の子だ！」

二人は、苦しそうに咳をしている女の子を見つけたのだ。歳は二人と同じか、ひとつふたつ下、といった印象を受ける。

アジズたちの世界——大陸——では珍しい、……と言うか『いない』だろうが、そのショートな髪とつぶらな瞳は、純の黒色をしている。
「ゴホツゴホツ……」

彼女はひどく咳き込む。

アジズたちに気付いてはいるものの、言葉が出てこない。あまりの咳き込みに、のどがやられてしまったようだ。

「シリル、どうする？」

アジズは、博識なシリルに尋ねた。

「……これは『喘息』……か？ それにしても、咳がひどすぎる。呼吸するのもやっとじゃないか！

……とにかく、さつき見えた町に一緒に連れていこう」

と、その時、微かだが、女の子は首を横に振りながら

「今は、ダメ……」

と言った——ようにアジズたちには聞こえた——。

「何かあんのかなあ？」

アジズは考える。

「きつと事情があるんだろう。少しここで、様子を見るとしよう」

シリルは簡潔に事態を処理した……のだが、新たな“事態”が行を襲った。

「……おい、シリルフ。こりゃ、やばいぞ……」

アジズはもう、うつすら勘づいていたようだ……、三人の周りを取り囲むように、三つの大きな塊——見た目はクマだが、異常に大きい——がこちらをじつと見ている。

「なっ……何だ、あの生物は！？ 僕が今まで見てきた本には載ってないぞ！」

シリルは叫んだ。

シリルは、普通に暮らしていれば、大陸の全生物を知っていると

自慢すらできただろうに。

新大陸を発見した今となつては、その未知の生命体の数に圧倒されることになるのだろう。

シリルは、今すぐにでもこれら異生物や異大陸の情報を手に入れたかったが、世界以上に、情報の占める空間は広がった。

「シリル！ その女の子を頼む！ どうにか逃げるぞ！」

アジズは、いつもの狩りのときのように、剣を背中から抜いた。ただ、この時ばかりは『狩り』とはケジメをつけて、命を奪うという所までは行つてはならないと心に決めていた。

シリルの方はと言うと、この状況からして、女の子を背負つて逃げるだろうことが、はっきり読み取れた。

……シリルはためらっていた。

（女の子……、走れそうもない……、誰かが背負う……、アジズに任せる訳にはいかない……、やはり僕が……）

実のところ、シリルは女性に対して『得意』という方ではなかった。……かなり苦手な方である。

シリルは苦渋の決断を迫られた。

「せ、背負つてやるから……」

シリルはそう言つて、女の子に背を向けた。

シリルがほつとしたことに、女の子は言つた通りにしてくれた。

（……神様、ありがとう……っ！）

ある意味モンスターと言える、この三体の化け物が、三人をこのまま待つてくれるはずがなかった。

……一体がアジズに、その巨大な腕を振りかざした。

「なっ、素早いな、コイツ……っ……！」

アジズは、予想を越えたスピードに驚きはしたが、かわすのにはまだ余裕があつた。

砂煙があがる中、他の二体もアジズとの間隔を狭めていく。

（仕方ねえ、一振りいくか……）

アジズは、シリルたちに近い側の一体を標的と決めるといなや、

その肩めがけて渾身の一振りを食らわせた。

……が、ここでまたもや予想外なことに、剣が振り抜けない！
「うっ……、カタいっ！」

結局それは、斬るというより、叩くといった感じに終わった。
だが、モンスターをひるませる程の威力は十分にあった！

（今だっ！）

アジズが、そう心の中で思ったとき、シリルもまた、ここが逃げるチャンスだということを知っていた。

第七話：疑問

一行は町の手前まで来ていた。……上手く逃げきれたのだ。

シリルは——やはり——息を切らしていた。

その顔には、何か、達成感のようなものが感じられる。

「……あつ、あの……」

シリルはふと我に返る。

「もう大丈夫です……」

「あ、あ、あつ……、すまない……」

シリルは慌てながらも、ゆっくりと女の子を背中から下ろしてやった。

「そう言えば、だいぶ咳が治まったな」

アジズは、まだ心配だ、という表情で女の子を見ていた。

女の子は恥ずかしがり屋なようで、下を向いて微笑んでいた——ほほを赤く染めて——。

「あつ、さっき何か言いかけてたようだけど、あの町に何かあんのか？」

アジズの透き徹った声が女の子を襲う。

そこに、シリルがお邪魔にも割り込んでしまった。

「おいおいアジズ。やっとこやって落ち着いたんだ。先ずはお互い、自己紹介といこうじゃないか」

アジズは、そっか、という感じで、怒ってはいない。

アジズにはもともと、女の子が感じている『ときどき』がなかったようである。

「えっと……、オレはアジズ。こっちがオレの親友のシリルっ。オレたち、ここは初めてなんだ」

アジズは、自分たちが海の向こうからやって来たことなど忘れかけていた。

ただの見知らぬ土地。それほど“世界”が自然なものであったのだ。

「……わたしはヒナ……」

「えっ？ ヒナ……？」

アジズは聞き返した。女の子が、ささやくような小さな声で言うものだから。

「……うんっ」

ヒナはゆっくり頷いた。ちよっぴり嬉しそうに見える。

「なる程、ヒナか」

シリルは相槌を打つように言った。そして、いよいよ本題に入る。アジズが聞く。

「ヒナはどうして森にいたんだ？」

「えっ……、それは……」

ヒナの表情から、何かを意図的に隠そうとしている訳ではなく、『言いづらい』ようであることが読み取れた。

言おうとは思っているが、どう言ったらいいのか……。

アジズには、そんな微妙な気持ちを感じとることができた。

「言いづらいなら別に、言わなくても……って、なっ、泣くなよっ」

ヒナは涙を落としてしまった。アジズは困惑した。

それを見ていたシリルは言った。

「町で何かあつて、逃げる感じで森に入ったのだろう。……ただ、僕たちと遭遇してなかったら……」

ヒナは申し訳なさそうに目を下に逸らした。

「……ごめんなさい」

「ヒナは悪くねえよ」

アジズは優しく言い放った——いつもより慎重に——。

アジズは、自分がヒナに優しく接していることに何か感じたようだ。我に返ったように話を切りかえる。

「と、とにかく……、今からどうするかだ」

「うむ、そうだな。……ヒナ、もう町に行っても大丈夫か？」

シリルの問いに、ヒナは小さく頷いた。

町は、鈍く硬い金属音を除き、森と同じくひっそりとしていた。
ヒナの言う『言いづらい出来事』は過ぎ去った後のようだ。

ヒナは今のところ体調もよく、のどの方も驚くほど回復していた。
アジズたちは、一緒にヒナの家について行くことにしたのだが、
その途中、一人の婦人に会った。

ヒナは話しかけられている。

……が、アジズとシリルには、その婦人が何を言っているのか分
らなかった。恐らく、『言語』が違った。

「ち、違うんですっ！」

ヒナが大きな声を——と言っても、普通の人と比べればそうでも
ないが——出した。

婦人は不愉快そうにアジズたちを一瞥し、何やら言い残して去っ
て行った。

「なんて言ってたんだ？」

アジズがヒナに尋ねる。

「……………」

「言いづらいなら……、今度は泣くなよっ」

ヒナはまたも涙を目にためていたが、のみ込むように我慢した。
相当つらいことでも言われたのだろうか……。

（おかしい。何故ヒナは僕たちとも……）

シリルは、アジズが疑問に思わずにいる重要な点に気付いていた。

「……………ただいま」

「おかえり、ヒナ。……………おや？ その人たちは誰だい？」

「あっ、この人たちはね、その……………、わたしの命の恩人……………」

「ハッハッハ。こりゃたまげたな。お二人さん、ありがとよ。ヒナ

は時々帰って来ないもんだからね。今朝もどこかへ行っては帰って来ないからさ、まあ、いつものことだとは思っても心配なワケよ」

アジズたちを待っていたのは、とても意気盛んな黒髪の男だった。

「……どうやら、ヒナの父親にあたるらしい。」

「……お前の親父さん？」

アジズが小声でヒナに聞く。

「そうだけど……？」

「んー、なんでヒナはそんなにアレなのかなあ？」

「……アレって？」

ヒナはだいたい分かっているようだった。

二人が話していりうちに、テーブルには『お茶』が出され、シリルはイスに腰をかけた。

「だから、ヒナは何か、……か弱いつて言うか……」

「……そうなのかな、やつぱり……」

ヒナはちよつと照れ臭そうに笑っては見せたが、内心、気にしているだろう。アジズはそれを感じてしまった。

「いや、別に、それが悪いとかじゃないんだ。……ヒナはヒナらしくていいと思う」

アジズは人をつらくさせるのが得意だった。

そう、得意だった。

しかし、人というのは、相手をつらくさせたくないと思えば思うほど、自分の刃を隠そうとするものである。

また、もし刃が機能してしまったときには、血のついた刃を花にかえようとするものである。

負わせた傷を治せるかは別にして、相手を思う気持ちこそ、一番の根底にあるべきものなのだ。

ヒナは胸が熱くなるのを感じた。

「……ありがとうっ」

「何言つてんだよ……（オレも……）」

ようやく四人がテーブルを囲んだとき、シリルのお茶は半分にな

っていた。

シリルはこの時を待っていた。

「お話したいことがあります」

シリルは、異大陸の大人相手に、堰を切ったように語り始めた。

第七話：疑問（後書き）

ヒナ登場を機会に『……』が増えます。読みにくいつてことも……。

第八話：夢の限度

「なるほど、アンタたちは別の大陸から来たと。

まあ、おかしい話じゃないね」

「おかしい話じゃないですって!？」

シリルは、ほとんど立ち上がりそうになりながら叫んだ。

「そう、確かにアンタの言う『船』とやはすごいかも知れないが

……、王都に行けばさらにすごいものがある。わたしたちが海を越えようとしなかったのは、王都がすでに十分満たされていたからなのかも知らないな」

シリルが詳しく尋ねたところ、『電気力』に相当するものが、こちらの大陸では珍しくないこと、また、王都の繁栄の裏で、ここ『トリビュ』の町のように徹底的に工業化された地域があることなどを知ることができた。

（この大陸は——この“世界”は——僕の好奇心をエサにでもするというのか？

……面白い、もっと知りたい!）

シリルは、心を静めるように一息ついて、今、最も気がかりなことについて語り始めた。

「すみません。僕の見当違いかも知れませんが……、なぜ、僕たちは言葉が通じるのでしょうか？」

先程、ある婦人に話しかけられた際、僕はその言葉を理解できませんでした。

……言語が違ったんです。

しかし、今、あなたとは普通に話すことができます。この町の人で、あなたと違う言語を話される方もいらっしゃるのですか？」

「いや、そんなことは……」。

そうだなあ、お二人が別の大陸から来たと言うなら、もしかしたら、こうやって話し合うことはできんだらうなあ。

……『人類は共通な言葉をもつ』ってのでどうだろう?。」

「そんなバカなっ! ……いや、すみません……。」

実際、僕たちの大陸でさえ言語は様々です。それはここでも同じなのでは?。」

「うむ……、それはそうだな……。」

こんな二人のやりとりにアジズはついていけない。

「よく分かんねえなあ。」

……ヒナはオレたちの言葉で話してたぞ」

この、思い出すようにアジズが言ったことこそ、シリルが一番疑問に思っていることなのだ。

「そこさ。おかしな『言語の段差』だ。矢印の向きが普通じゃない」「へっ?。」

アジズのいつもの反応。

「だから、あの時、ヒナと婦人は、わざわざ言語を変換していたことになるんだ。」

僕たちの言語をT、婦人の言語をQとしよう。

ヒナは婦人からQで話しかけられる。

ヒナはそのQを頭の中でTに変換し、Tで応答する。

婦人はそのTをQに戻して返答する。

つまり、ヒナと婦人は、『二つの異なる言語』を知っていることになるのさ」

一同静まり返る。数字が24個と、針が5本ある『時計』のキツコキツコという音が、不思議にも狂って聞こえる。

「……わたしは、普通に話してただけだよ」

ヒナは小さく言った。

「……『以心伝心』ってやつかな?。」

ヒナの父の声が、まとまった空気の振動として、みなの方へと吸い込まれていった。

「きつと、知らぬ間に、こう無意識のうちに、心で感じとっているだけに過ぎないんじゃないかな? 俺たち人間は不思議な生きもん

だから、こういうのもあつていいと思うんだ」

「そ、そんな理屈ハズレたことが……っ！」

シリルは、またも口を滑らせた。

「まあ、シリルくんだけ？ 俺は理屈っぽいことが得意じゃなくてね、いつも思うんだが……、必要『以上』に証拠を強調したり、根拠のないことを否定するってのは、夢のないことだって思わないかい？」

俺たちはもっと、夢を見ていいと思うんだ」

ヒナとアジズはあまり話に参加していないが、それぞれ何かを感じているようだ。……もちろん、シリルでもある。

「……名を何とおっしゃるんですか……」

「ん？ 俺の名前か？ 俺はヘンズだが」

「……僕の思想に影響を与えた一人として覚えておきましょう」

「ハッハッハ、そりゃ嬉しいねっ」

シリルは、ヘンズさんの気ままな一言に少々あきれていた。

(……ヘンズさんの考えも一理あるかな……。ただ……)

シリルは、ヘンズさんに体当たりするかのように語り始めた。

「ただ、ヘンズさん……、あなたももっと夢を見て下さい。このままでいいんですか。森は枯れ果て、……恐らくこれは町の工業化が原因でしょうが、空気も異常に汚染されています。」

……王都への貢献より大切なことがあるでしょう？」

「ゴホッゴホッ」

ヒナがちょうど咳き込み始める。シリルにとっては都合が良いが、アジズにとっては心配である。

「……夢を見るのには限度があるんだよ……。王権国営の工場をいまさらどうしようもないだろ？」

「頼めばいいじゃん」

アジズが割り込んだ。

「ヒナもこうなんだ。絶対わかってくれるよ」

アジズの目は輝くように純粹だった。言葉にも不安など感じられ

ない。

シリルは考えた。

（いつもの僕なら否定するだろうが……）
なぜか笑みがこぼれた。

「そうですよ、ヘンズさん。なんなら僕たちが王様に直接お会いして、訴え申し上げます」

「……そんなこと、できるはずがないだろ？」

「いや、できます」

「行っても無意味だと思うがね……」

シリルは、この言葉にはすぐに反応した。

「この世に『無意味な事』なんてないんですっ」

ヘンズさんはヒナを見つめて、それからゆっくりとまぶたを閉じた。

「……そうか」

深いため息とともに沈黙が訪れる前に、ヒナが動いた。

「お父さん……、わたしもこの人たちと一緒に行っていい？……」

ヒナは少し息が苦しそうではあったが、いつにないはつきりとした口調で言った——言い切った。

「ヒナ……お前……」

ヘンズさんは戸惑っていた、……というのは当たり前だが、ヒナの真剣な目に戸惑っていた。

ヒナはいつも、優しい目をしていた。

楽しいときも寂しいときも、……悲しいときは特に。

ヒナは泣き虫だが、泣いた後には笑ってくれる子だった。

怒ることはほとんどないが、もし、ヒナが怒るといったら、それは、何か自分の中で守りたいものがあるときだ。

そして、真剣なときというのは、その延長、ヒナが『女の子』であるときだ。

「……お二人さん、ヒナを頼んだよ……。男二人だ。守りきれないとは言わせないぞ」

どうもこう話が進んでいく……。やはり、熱意とは、それを受け取った誰ものの心の奥底にまで届くことができるものらしい。

アジズとシリルは顔を見合わせた。その顔には、自然と笑みが浮かんだ。

二人はヒナに出会ったときからずっと、こうなるのではないかと予感していたようだ——と言うより、こうなっただけ……。――

「……ありがとう、お父さん……」

ヒナは目を閉じていた。

ほっとしたのだろう、やわらかく微笑んだ。アジズはその一瞬を見てしまった。

息が苦しいなんて言ってもらえない。喜ばなきゃ。……なんて思っているのだろうか。

アジズは、ヒナが目をつぶっている間に——ヒナに気付かれない間に、じっとそれを見つめていた。

第九話：泊まり夜

確かに、王都への道のりは、ヘンズさんがくれた地図の通り、困難が予想された。

険しい山脈、それにアジズやシリルが見たことのない巨大な砂地——『砂漠』——が広がっている。

しかし、3人には不安はなかった。きつと乗り越えられる気がした。出発は日が明けてからに決まった。アジズら二人は泊めてもらえるようだ。

夕食の支度はやはり女の子、ヒナが整えてくれている。

ヘンズさんは、ヒマそうなアジズたちのために、あるスイッチを押した。

「何です？ これは」

「ふむ、やっぱり知らなかったか……。これは、遠くの“世界”の様子を映像や音声として、同時に見たり聞いたりできる、すごい道具さ。こっちじゃ結構、普及してるんだけどな」

シリルの好奇心がえぐられる。

「す、すごいっ！！ これはどこかの映像なんですね！？ ……どうやってコレで映し出してるんだ？ ……ヘンズさんっ！！」

アジズは、ヘンズさんのおもしろ特ダネがシリルの専門特許になっってしまったので、ひとりとり残されるようにヒマになってしまった。

「ったくー、いいよなあシリルは。ああいう話がわかって……」

アジズは仕方なく、——ちよっぴり気になることもあって、——ヒナのいるキッチンに行ってみることにした。

「おおっ、ヒナもなかなかやるじゃんっ」

完成した一品を見て、アジズは言った。「あっ……アジズさん」「アジズ、でいいよ」

「えっ、じゃあ……アジズっ——……さん……」

「変わってねえなあ……」

アジズは何だか嬉しかった。こう、ヒナと話すだけで。

ヒナは、ほほを赤く染めて微笑んだ。

つけ合わせの一品づくりに集中はしているものも、やはり、アジズが気になるらしい。照れながらも、どうにか完成させた。

「オレ持っていくよ」

アジズは、皿に手をのびしながら言った。

「えっ、……ありがとう……」

「ヒナは素直でいいよなあ。オレも見習わなきゃ」

「そんな、わたしから見習うことなんて……」

「結構あるもんだぜ？」

アジズは、ほっかほっかの料理をテーブルに並べていった。

ヒナの手は、自然と胸にあてられていた。

「んー、なかなかいけるじゃないか。——んや？ ヒナ、これは……この赤いのは何だ？」

シリルは、知らないモノには相変わらずであつた。

シリルは、先程ヘンズさんが見せてくれた『面白いもの』の理屈が分かって、上機嫌であるようだった。

ただ、心残りがあつた。

「ヘンズさん、あの装置は僕とアジズにとってはあまり有効じゃないみたいですね。婦人の件同様、言葉が聞き取れない」

「うむ、おかしいことだ。……オレにはアンタたちの言葉で話しているように聞こえるんだが……、無理かい？」

シリルは頷いた。

アジズには、その装置の中に小さな人が立っていて、何かを話して

いるように見えたが、やはりアジズも、何を言っているのかは分らなかった。

「まあ、今夜はゆっくり休んでくれ」

ヘンズさんは穏やかに言った。

テーブルの真上にある、『電気灯』に同じ『光』の明かりが、ほんのり黄色がかって、4人を外の闇から守ってくれていた。

ヒナはお風呂に入るとのことである。

旅に出発すれば、やはり、入れない日がほとんどだろう。今夜はちよつぴり『なが風呂』である。

「お二人さん、のぞきに行きたいんじゃないの？」

「ヘンズさんのバカっ……」

アジズは何となくだが怒っていた。

アジズとシリルの二人に限って、そんなことはない。

……二人とも、なぜか異常に紳士である。

床につく前のゆつくりできる時間に、旅に出る3人組は、ヒナの部屋に集まった。

「服、どうしようかな……」

ヒナは、独り言のように小さくつぶやいた。

「えっ？ 服、何種類もあんのか？」

聞き取ったアジズが言った。ヒナはどきつとした。

「う、うん……」

「すげえな。オレたちの“世界”じゃ、服って高いからなあ」

アジズの言葉に追加とばかりにシリルが続ける。

「すべて手作業だからな。……こっちの方では『電気力』を活用して、生産性を上げているらしいから、やはり差が出る」

ヒナはいくつか取り出してみせた。

……『鮮やか』なピンクなどは、アジズたちの暮らしではめったに見れない。

「これなんかいいんじゃないの？」

アジズが指さしたのは、そのピンク色のものだった。『フード』
つきの『トレーナー』。やはり珍しかった。

しかし、ヒナは少し困っているようだった。

「その服、まだ一度も着たことなくて……」

「どうして？」

アジズが聞いてやる。

「その……、派手なやつて……」

どうやら、買ってきてもらったのはいいが、ヒナにはちょっと着る勇気がでない『しろモノ』らしい。

「そっか……」

アジズは肩を落とした。まあ、そこまで気にはしてないようだが……。

シリルは少しばかり、ヒナに『つけぐち』した。

アジズが他の服を見ている間に、こっそりと。

「……アジズは母親を亡くしててね。その母親の好きな色がこの色だった、て訳さ」

ヒナはそれを黙って聞いていた。

アジズは、どの服も良さそうなので、困惑困惑だった。

「いつの間にか、オレが無理やり決めようとしてたみたい……。やっぱヒナの好きな服を着て行くのが一番だよ。勝手なこと言ってゴメン……」

「いや、そんなことないよ……。嬉しかった……」

「——えっ？」

「うっん、何でもない」

アジズは、ヒナが——ちよっぴり恥ずかしそうに——微笑んでくれていることが、何よりも嬉しかった。

第九話：泊まり夜（後書き）

ここまで見て下さった方は数少ないと思います……。だからこそ、数少ない読者さんのために、頑張りたいと思います！

第十話：ひさし朝（前書き）

変なストーリー展開は、大目に見てください！（汗）／短い（？）
かも知れませんがごゆっくりどうぞ。

第十話：ひさし朝

アジズは目を覚ますと、自分がベッドの上で横になっているのに気付いた——ちゃんと、ふとんをかぶって——。

（あれ？……オレ、いつ寝たんだっけ？）

消灯された、しかしほのかに明るい部屋の中、アジズは恐らくひとり、天井をぼんやり眺めながら、思い起こそうとしていた。

夜は、今からだんだん明けようという具合である。

——というのは、窓を隠している淡い水色のカーテンとその隙間から、青く湿った光が知らせてくれたのである。

アジズはふと左に振り向いて、そのままどきつとした。思わず声が出そうになる。

（なっ、なんでヒナがオレのとなりに……っ！？）

部屋の隅に、壁に接するよう置かれたベッドの上、その壁側の方、……アジズはヒナを発見した。

ヒナはあたたかそうに、アジズと同じふとんの中で眠っている——アジズの方からだを向け、まるくなるように——。

アジズは動こうにも動けなかった。……よく考えてみると、だいぶ近い……。

アジズは、ヒナをじつと見つめているうちに、逆になんだかほっとしてきて、その場にいることに、かすかな居心地のよさを感じているようだった。

ヒナのくちびるは、その両手に遮られて見えなかったが、アジズには、ヒナが優しく微笑んでいるように思えてならなかった。

（……いい夢でも見てんのかなあ？）

アジズは仕方なく、もう少しだけ夢の中で時間を費やすことにした。

アジズは目を覚ますと、自分がベッドで《ふとんをかぶって》横になっているのに気付いた——今度はちゃんとひとりで——。

（ヒナはもう起きてんのか……）

アジズは、ここ『トリビュ』では貴重な日の光をとり入れた『ホワイト』ベースのさわやかな色調の部屋の中、ひとり、壁をぼんやり眺めながら、ヒナの寝顔を思い起こしていた。

太陽は、こうもあたたかく、すべてをつつみこめるのだろうか。それとも、すべては無理なのだろうか。

アジズは、ぼんやりするついでに考えた。

以前、アジズが悲しみに暮れていたとき、太陽はアジズを励ましてはくれなかった。

そのあたたかさを分けてはくれなかった……。

『太陽は地上で起こる何事にも無関心である』ように感じられた。考え方によっては、太陽は残酷である。

しかし、逆を言えば、無干渉な奴である。

何となくだが、見守ってはくれている気がする。

……落ち込んだ自分をじっくり見つめることは大切だと、太陽はとつくに知っているようだ。

要するに、考え方で、太陽はあたたかくも冷たくも感じられる。

アジズは、今、自分が太陽を『あたたかい』と判断できたことは、とても幸せなことなのかも知れないと思った。

アジズは、のんびり寝起きを楽しんだ後、リビングへ向かった。テーブルにはすでに、シリルが本を両手に、思いつき猫背な姿勢で座っていた。

「おはよ、シリル……」

アジズは、とくに返事を期待する訳でもなく言った。シリルは、本に夢中である。

ふと耳をすます。

キッチンでは朝食の準備がされているようだ。きっとヒナに違いな
い。

アジズは、『ヒナ』で思い出し、立ったままシリルに話しかけた。
「なあなあ、シリル……」

「ん？ ああ、アジズ。起きたのか」

（……さっきからいたのに……）

アジズは、ある意味シリルの集中力を尊敬した。

「んで、どうした？」

シリルは本に視点を戻しながら言った。

アジズは、すかさずシリルのとなりのイスに座った。

「……オレって昨日、いつ寝た？」

「ヒナの部屋に集まって、少ししたらすぐに寝てただろ。僕がルートの説明をしたときには、壁によりかかって熟睡してたぞ」

アジズは確かに、ルートのことなど聞いてはいなかった。

「えっ……でも、起きたらベッドの上にいたんだけど……」

「覚えてないのか？ 一度起こしたら、お前は『もう寝る……』とか言つて、勝手にヒナのベッドで寝たんだよ！ だから、ヒナには床のほうでな、ふとんでも敷いて寝てもらえるよう頼んだんだ」

アジズが『なるほど！ そうか』とは思えなかったので、一瞬、沈黙の亀裂が走った。

「……シリルは？」

「僕は、ヘンズさんの部屋にふとんを敷かせてもらって、そこで寝たさ。……ったく、アジズは……。ヒナに悪いと思わないのか？」

シリルは、すべてを話してくれた。ただ、ヒナがベッドで寝ていたことをシリルは知らないようである。

（じゃあ、ヒナは、オレがいるのを嫌だと思いながらも、ベッドで寝ることにしたのかな……？）

そこに、顔を洗ってすっきり目覚めたヘンズさんがやってきて、テーブルを挟んでアジズたちと反対側に陣をとった。

「おはよう、お二人さん。よく眠れたかい？」

それに応えたのは、アジズだけだった。

「おや、シリルくんは早速、オレのあげた『例の本』を読んでくれるのか。——で、本当に文字が読めるのかい？」

シリルは「ようやく反応を見せ」堂々と答えた。

「はい。……この文字は『旧イスグラード帝国』のものでしょうか？僕は独学で解読しましたから」

こちら側の大陸でも、シリルの言う『旧イスグラード文字』の文献が残されていた。

その謎はさて置き、先ずは読んでみる価値があった。

偶然にも、ここ、ヒナの家には、このようなシリルに打ってつけの書物が5、6冊置いてあった。

「……それにしても、ヘンズさん。一体これをどこで？」

シリルのこの言葉により、二人の『通』による熱い討論が今、まさに始まるうとしていた。

アジズは勘よく、それを察知した。

（また長くなりそうだな。まあ、ちようどいつか。ヒナに謝り行く……）

アジズはそつと立ち上がり、その場から避難するように、ヒナのいるキッチンへと向かった。

第十話：ひさし朝（後書き）

『次話も頑張るぞーっ！』 《おおーっ！！！》

第十一話：お待ち扉

キッチンにはやはりヒナがいた——『トースター』のパンが焼き上がるのを待っているようだ。一息ついている。

「おはようっ、ヒナ」

アジズがゆつたりとした口調で言った。

ヒナはやっぱり照れ臭そうに、少し間をあけて返した。

「おはよ、アジズ……」

「そんなに恥ずかしがることないのに……。特にオレの名前言うときとか」

アジズは、ヒナから『さん』をつけられずに呼ばれたのには少し驚いたが、……嬉しかった。

やはりアジズは、呼び捨てにされる方が気が楽なようだ。

「あのさ、ヒナ……」

アジズの声が少し小さくなった。

リビングの方からすっかり意気投合したシリルとヘンズさんの共感の笑い声が聞こえてくる。

「昨日はごめん……。オレ、ヒナのベッドで……」

アジズが言いづらいのと同じくらい、ヒナも聞きづらそうだ。ヒナのほほが赤い。

「いいよ全然っ。ちゃんと寝れたし……」

「……二人がベッドじゃ窮屈だったろ？……嫌だったんじゃないかな？」

アジズは不器用にも思いきって聞いてしまった。

「——えっ、ふたりって？……」

ヒナは動揺していた。

「何言ってるんだよ。オレ、一回ちょっと目が覚めてさ、……ヒナが横で寝てるからびっくりしたんだぜ？」

ヒナの『恥ずかしい度』が頂点に達した。
(知られちゃってたんだ……)

もうそろそろパンが焼けてもいい時間。

パンが焼けてくれれば、ヒナはこの恥ずかしい空気からの逃げ道を見つけられるかも知れない……っ！

しかし、ヒナは——少し——それが嫌だった。

こんな無邪気な自分には、今まで出会ったことがなかった。

「……アジズに気付かれないようにやったのになぁ……」

ヒナはなぜか微笑むことができた。

「……えっ？」

「うっん、何でもない」

ヒナには、アジズが聞き取れたのか、それとも聞き損ねたのかを確認する勇気はなかった。

……ただ、どちらにしても、ヒナはもう言ってしまったのだ。
なぜかヒナの中には、何かをアジズに気付いて欲しいと思う“ヒナ”がいた。

トースターが『チーンッ』と声を張り上げて、キッチンのご主人に『できましたー！』と伝達した。

ヒナは朝食づくりにもどる前に、アジズの質問に答えるべく、真剣に向き合った。

「嫌じゃなかったよっ」

アジズは不意にどきつとした——最近、妙に多い気がする……。
「そ、そっか、なら安心した。……やっぱヒナはわかんねえなぁ。
普通嫌がると思ったけど……」

「……アジズはわたしが横で寝てて、嫌だった？」

「えっ……」

ヒナは、素直に想いを重ねて尋ねた。

アジズは思わず真剣な目をヒナに見せてしまった。

ヒナはさりげなく朝食の支度を再開する。

（……この『嫌』の反対って、『嬉しい』……なのかなあ？）

アジズはしばらく、ヒナが最後の盛りつけをするのを眺めていた。

ヒナは

「できたっ」

と言うと同時に、アジズの方をちらつと見た。ここで目が合うとは、何とも新鮮である。

「オレ、ヒナが気持ち良さそうに寝てたから、逆に嬉しかったよ。

……なんか変だけど……」

本当に理由はそれだけ？……まあ見逃してやろう。

ヒナは、自分がどんな顔をして寝ていたのだろう、とちょっと恥ずかしくなった。

（気持ち良さそうに……かあ）

アジズは、ヒナが——ちょっと恥ずかしそうに——微笑んでくれていることが何よりも嬉しかった。

「アジズ、……これ運んでくれる？」

ヒナは初めてアジズにお願いごとをした。

アジズは、それには何も返事せず、——そのかわりとは言わないが——小さくささやいた。

「やっぱり似合うじゃん」

「えっ？」

ヒナは、につこりと微笑むアジズを見つめ返した。
アジズは皿に手をかけて去ろうとする。

「……もーっ、そんなことは始めに言つてよっ。気付いてないのか
と思つたじゃん……」

「ごめんごめん……。最初は本当にわかんなかったんだよ。違和感
なかったからさ……」

ヒナは去りゆくアジズの背中を見守るように、じっと手を胸にあ
てて立ちつくしていた。

『ピンクのトレーナー』

ヒナは自分の袖を見て、確かに自分が『自分』であることをたし
かめた。

(……いっぱい話せた気がする……)

朝食の時間はゆつたりと流れていった。

出発当日だというのに、ここのんびりとした空気に包まれていると
いうのも、不思議ではあるが、……案外『旅立ち』というのは、こ
うあるべきものなのかも知れない。

(ふう……、ここに来てヒナに出会えたのは幸運だったな。食事に
ありつけたし……)

シリルは、腰かけたイスの上で、片付けられていく食器を優雅に
眺めながら思った。

実は、シリルは向こうの大陸に忘れ物をしていた。

……重要なそれは……——『食料』だった。

確かに、ヒナを背負ったとき、何かもの足りないとは感じていたが——予定では背負って行くはずの『リュックサック』の存在などすっかり忘れていた——、まさか自分に限って、そんな重大な過ちに気づかず、未知の世界へ漕ぎ出そうとは……。

まるで自分がアジズを『死』の旅へ連れ出そうとしていたようで、たまらなく心が痛めつけられた。

……と言っても、もともとこの旅は、その種の旅に近かったのだが……。

今では——ヒナの家にいる限りでは——、だいぶ安定していると
言える。

そして、旅の土台となる筋ができたことで、この旅は幾分安全なものとなった。それはシリルが思うところの『幸運なこと』である。

「シリル——っ。そろそろ支度した方がいいのか？」

アジズは——やっぱりのんびりとした口調で——言った。

「あっ、……ああ。そうだな……」

思えばシリルにはアジズがいた。

この旅は、アジズがいなければ成り立たない。

シリルは考えることなく、そう感じた。

王都行き三人の服装は、思った通り、ばらばらだった。
それが個性の顕現なのかは分からない。

ただ、本人たちが自身の格好に何とも思っていないのは確かだ。もう、その装飾物と一体となって、切っても切り離せない特有の雰囲気をもっている。

アジズは、『抹茶』を思い出させるような薄手のしびい緑の『ジャケット』にさらさらなベージュの『ジーンズ』。

そして、はおったジャケットの下には、胸もと辺りに横に2本空色のボーダーが入った白の『Ｔシャツ』を着ている。

いつでも自然と一体になれるようにと、アジズを包み込んでいる。

もちろん、これは『いつもの』服装であって、わざわざ着替えた訳ではない。……まず、他の服がないのだ……。

仕方のないことだが、こちらの“世界”では、アジズとシリルは『汚れモノ』である。

いつも同じものを着ているのだから、周りの人からどう思われることだろう。常識が違う。

今回は『旅』ということだから、一応の例外としておこう……。

シリルは、内ポケットが6つある専用コートに身を包み、なかなかまとまった感じがした。

内ポケットには本が一冊ずつ、計6冊収納済み。

細身の体は、このコートを得て、ようやく落ち着いたというところだろう。

ヒナは、アジズの注文を聞き入れたカラーで優しく抱かれていた。ただ、二人と違って、慣れない格好に少しばかりの不安を感じている……ように見えたのは先程までか。

今はもう、その新鮮さと明るさが《ヒナらしくて》爽快である。

旅の支度も終えて、ヘンズさんの口数はますます増えた。

しかし、三人が最後の扉を前にし、『いざ、旅立とう』というときには、もう何も言えなかった。

アジズは、靴ひもを結んでいたが、視線は床の一点にあった。

……ここにいる一人ひとりが、様々な想いを頭の中で言葉にすることなく、心に大切にしまっておくことに決めたようだ。

視覚や聴覚などから得た情報は、暗号のまま、頭の中を回転するだけである。

自分の行うつひとつの動作に、わずかに残っている『コントロールできる意識』を奪われ、ほとんど無意識の状態に近い。

アジズは靴ひもを結び終わると、ようやく考えることができるようになった。

（出発かあ……。ヘンズさん、どう思ってたのかなあ……）

アジズは自分の親父の顔をヘンズさんに見た。

（きつと親父も……）

玄関の扉がひらいた。

もちろん、これはシリルが開けたのであって、勝手に開いた訳ではない。

……もしも自分たちの手で開けようとしなかったら、ずっと閉じたままなのだ……。

第十二話：月アカリ

森に闇が訪れた。

夜空にとどまる分厚い雲の輪郭が月アカリに照らされ、時間がとまった。

トリビュートの町からそう遠くはないが、夜も聞こえるあの金属音は届いてこない。

そして、今日は珍しく、森のとある所でうつすら一筋の煙が立ちのぼっている。そこには若者が三人程、火を囲むようにして各々くつろいでいた。

「シリル、何してんだ？」

一人の若者が尋ねた。

シリルと呼ばれた青年はすぐには返事せず、その手に持っている本に何か書きこみを終えた後、他の二人にそのページを見せながら言った。

「アジズもヒナも、こいつを覚えているだろう？」

そこには見覚えのある塊。

「あのクマみたいな奴……。ヒナと最初に出会ったときに襲ってきた……」

アジズは記憶を引き出すようにして答えた。

その真つすぐな瞳は、いつもと変わらず健在だ。

「その本どうしたんだ？」

アジズはとりあえず聞いてみた。

「ヘンズさんに頂いたのさ。まあ、古い図鑑なんだが………ちょっとおかしな点があるんだ」

シリルらしい展開。

ヒナは図鑑のその『グローバー』のページを見つめながら、もの思いにふけているようだった。

「まず、『体長一・五メートル、極小型』とあるが、僕たちの遭遇した『グローバー』は優に二メートルを越えていた。それに……」

アジズはとにかく集中して聞いた。そのおかげで、大体シリルの言いたいことがつかめた。

要するに、図鑑の『グローバー』とこの前遭遇した『グローバー』がどこか違っている。

……この程度が限界か。

ふと、アジズがヒナの方に目をやると、ヒナは、チリチリと音を立てる上機嫌な炎をぼんやり眺めながら、バチツという響きを楽しんでいた。

(………ヒナって、こうして見てみると………)

アジズはゆったりとした空気に包まれた。

だが、それもつかの間、シリルの重たい言葉が入ってくる。

「……だから、アジズ、気をつけろよ。これから先、何らかの影響のためか通常と異なる特性を持った、その上、狂って人を襲うような連中に出くわすかも知れないからな」

アジズは、シリルが本を閉じて、それをコート左脇の一番上の内ポケットにしまうのを眺めていた。

「……なんでオレだけ注意されるんだよっ」

「いざという時に剣を使えるのが、『お前だけ』だからだ。もし、前の時のような状況下に陥ったら、その時は僕たちの分『気をつける』と言っているんだ。分かるだろ？……僕の予想が当たっていれば、まだまだ剣を振るう機会は増える……。お前に頼るしかないんだよ」

アジズは再びヒナの方に目をやりながら、少し肩の力を抜いて考えた。

アジズは狩りをして、命を軽々と奪ってきた。

自分の中で、けじめのつもりで『狩りだから』と言い聞かせる。生きるためには仕方ない。他の生き物たちの中でも狩りをする奴らはたくさんいる。

ただ、現人間は、今から食べようとしている肉を目の前にして、ほとんどがその肉の主の死に直面していないのだ。

アジズはその命が奪われる瞬間、いや、命を奪う過程に立ち会っている。

そういう訳で、一般人よりも少しは『命』とは何かについて既に分かっている気になってる。

そして、この『分かっている』と思い込んでいることが、とても危険なことでもあるということも、アジズは分かっている。

アジズにはとにかく、自信を持つ自信がなかった。

社会のルール上、人間は『食物連鎖』においてかなり上層に位置する数少ない種族の一つである。

もし、命を『おしまい』にすることが、この世で最も許されないことだとしたら……。
たとえ人間にとっては指先にちよこつと乗っかるくらいの虫であっても、その命は人間の命と同じ……。

そう考えると、たまたま人間の怒りに触れ、人差し指と親指の二本で一生を終わらされる虫の気持ちはたまらない。

……もちろん、ほとんどの人間が、逆にそんな殺し方は『気持ち悪い』と思い、自分たちの都合の良い方法で——手の汚れないやり方で——邪魔モノを潰しにかかるのだろう。

邪魔モノに認定されたのは気の毒だったねなどと、のんきに同情しながら……。

しばらくの間、アジズはいろいろと考えてみたけれど、はつきりとした答えが見つからないので、……というか、その『答え』がどんなモノなのかすら、まるで見当がつかないので、これについてはまた後日考えてみることにして、一先ず休もうと横になった。

そうやって、何度も何度も考えて、アジズはここまで歩んできたのだ。

完全に『素晴らしい答え』を導き出せた訳ではない。むしろ、全く考えがまとまらず、かえって混乱して迷うことの方が多かった。

はつきり一つに“答え”を絞る作業は一生をかけてでも慎重に行うべきだと、アジズ自身が何となく感じているのもあって。

ヒナとシリルは目を閉じておやすみ状態。

ひとり早めに横になっていたアジズは、二人が眠りについたのを確認すると、体を起こし、《一息ついてから》背もたれを探した。背後にちょうどいい傾きの平面をもつ大きな岩……。

アジズはその岩に背中を支えてもらうことにした。

アジズにはちよつとした任務があつた。

……『夜警』である。

二人が無防備にも寝てしまっているのだから、何かと対処できるよう待機しておく必要があるのだ。

アジズは前もって夜警を心に決めていた。

こうまでアジズを用心させたのは、あの『グローバー』——今のところ逃げるのが無難な相手——である。

星明かりの下、一人気配を吟味するという感じのアジズだが、ちよつと違った雰囲気の気配を察知した。

「……アジズ？」

その声はアジズをはつとさせた。

「……ヒナ、起きたのか？」

アジズはヒナと同じくらい小さく囁いた。

「ヒナは寝た方がいいよ。さあ、寝た寝たっ」

「……アジズは？」

ヒナのかすめるような優しい声……。

「オレは……もう少しのんびりしたら寝ようかなっ……」

二人はお互い、ほとんど声だけを頼りに暗闇と話をしていた。

「……本当？」

この言葉はなぜかアジズをしめつけた。

「……どうして？」

アジズはヒナの『本当？』の意味を知っていた。

「……声でわかるよ」

ガサツガサツと音を立てて、何かがアジズの隣に訪れた。

アジズは一瞬、様々な『敵』の姿を思い浮かべたが、星たちの光で微かに照らされた『それ』を見る前に、『それ』があたたかいものだと感じた。

旅二日目、今日こそは森をぬけたい。

シリルが手に握っているヘンズさんの便利アイテム『コンパス』は、地図と併用することで絶大な力を発揮した。第一の目的地を目指し、一行は着ちやくと進んでいった。

「ゴホッゴホッ……」

アジズとシリルは嫌な予感がした。

「ヒナ、大丈夫か!？」

シリルがアクシデントに戸惑う。ヒナの咳込みはひどくなる一方である。

「……仕方ない。焦らずに、今日はここで野宿にしよう」

シリルが提案した。

「いや、ダメだ」

ここで意外にも、アジズは拒否を示した。

その声は隠れた怒りを含んでいた。……ただ、『自分以外の何モノに対して怒っている』のではないのは確かだ。

シリルはアジズの目を見るなり、すぐに言い直した。

「……森をぬけよう」

アジズはヒナを背負い、再びシリルの後ろについて歩き始めた。シリルとの間隔は相当なものだったが、シリルは進むのをやめなかった。……シリルは、それでいいのだと分かっていた。

アジズはヒナを背中に、ゆっくりシリルを追う。そこには二人だけの空間があった。

「……お前、寝てないだろ」

アジズは小さく言った。ヒナは黙って聞いている。

もうだいたい落ち着いてきたヒナだったが、まだ熱気が残っていて、ぼんやりとしている。

「もう夜警なんかさせるかつ……！」

アジズの声はヒナだけのものだった。
アジズがつぶやくように言った言葉も、全部聞こえる……。だって、こんなに近くににいるのだから。

「……嫌だ、手伝うよ。これからも……」

ヒナは本当に小声で訴えた。それでもアジズが聞き取れる、二人は距離にいる……。

「バカ言うな。とつくに体調崩してんじゃねえか」

「……違うよっ、これと夜警とは関係ないもんっ……」
ヒナは心の中で微笑んでいた。

「アジズだって、寝てないんでしょ？……交代でやるうって言ったのに」

「……だから、オレは寝とけて言っただろっ？！誰も手伝ってくれとは言ってねえんだ」

アジズの『とげ』のある言葉。ヒナはちよつと心配になった。

「……本気で怒ってる？」

アジズはふと我に返った。

「……別に、怒ってるんじゃねえよ。ただ……」
いつもの素直なアジズなら、すっぱりと言えただろう、この時はなぜか次の言葉が口から出ようとしなかった。

沈黙は、最もおしゃべりする者同士を考えさせる時。その空気を嫌だと思い、軽い話題を探しては延々としやべり続けるのも面白い。

……ただ、恐れてはならない。この『とき』の大切さは、はかり知れないのだ。

沈黙の時ほど、『今、相手が何を考えているのだろう』だとか、考えさせられる時はない。

お互い、自分の気持ちに混じって、感じとられ易くなっているのだから、それを上手く利用して、相手を観察する者、自分の気持ち伝える者がいてもいい。

……不思議な空間である。

アジズたちの沈黙は、“探索の沈黙”から“暗黙の沈黙”へと移り変わった。

二人は、『この張り詰めた空気を当然あるべきものだと考えよう』という協定を結んだのだ。

……アジズもヒナも、黙って自分を演じている方が楽だったからである。

相手が『沈黙』を気まづく思わないで、自分と一緒にいてくれるなら、これほど安心なことはない。

ふと気がつくと、目の前にシリルがいた。

丘から見下ろすように、視界いっぱい広がる第一の目的地。

「……商業都市『ソメルシア』だ」

第十二話・月アカリ（後書き）

毎度ながら、数少ない読者の皆さまに感謝です…。あまり深い話ではないので、完結は意外に近いのかも…（深い話が書きた〜い！）。

第十三話：シリルと少女

一行は『ソメルシア』の中心、タウンストリートの繁華街をゆっくりと見物しながら歩いていた。

——というのも、予定よりも幾分早く、まだ空の青いうちに着いたからだ。

大荷物を背負った旅商人や、アジズたちのように旅居を探す者、ただでさえ混雑した通りの流れを遮る旅芸人の一座など、ここを訪れた者たちによって街は活気に満ちていた。

両脇の建造物のほとんどが明らかな木造で、その黒みかかった濃い茶色のためか、トリビュウの町に比べれば随分と歴史ある街のように思われた。

その二階と三階部分を繋ぐように、これまた『木』の板を連ねた吊橋が至る所に渡され、『空中都市』を建設している……。

シリルは

「よく橋が崩壊しないものだ」

と、その立体感のある光景に当然の恐怖を抱いたが、王都から商人たちが技術を伝えたのだらうと、一人しづしづ納得していた。

（……これは、日が沈むまで情報収集だな）

シリルは、後ろを歩いていたアジズとヒナの方を振り向くと、込み上げてくる『誘惑』に似た感情を押さえながら、奮えた声で言った。

「まずは宿を探そう……」

シリルは突然急ぎ足になって、間もなく、行き交う群衆の中に消

えた。

もはやアジズはシリルを完全に見失っていた。

「おいっ、待てよー！」

アジズの声も全て街の活気に消えた。

「……はぐれたら、やばいよ？」

ヒナの気ままな落ち着きだけはヘンズさん譲りなのか……??

アジズは、こんな状況下でありながらも笑わずにはいらなかった。

「じゃあ、ヒナなら今からどうする？」

アジズの問いに、ヒナはしばらく考えた。

「追いかける……とか？」

「なら追いかけてよっ」

二人はようやく歩調を速めた。

（すぐに見つかればいいけど……）

アジズはヒナの体調を心配しつつ、はぐれないようにとヒナの左手をしっかりと握った。

しばらくして、シリルは自分がタウンストリート最大の交差点に
いることに気がついた。

（僕としたことが……。ヒナがいないと情報収集はおろか、宿を見
つけることさえできないじゃないか！）

一瞬足を止めたシリルだったが、次々に流れてくる人ごみを避け
るように、左へと軌道を徐々に変え、かろうじて安全地帯を見つけ
ることができた。

ちょうど建物の日陰になっているその場所は、シリルにとって最
高の休息所だった。

足を休めれるというのは言うまでもないが、『必ず進まなければな
らない空間』から解放されたということに、何よりも安らぎを感じ
るのだった。

シリルは、自分の来た道の方をじっと眺めてみるけれど、思った
通り、探すには人が多すぎた。

（アジズとヒナはこの街のどこかにいるんだ。もし、何もかも天か
ら見下ろせてアジズたちの居場所も知っている神のような存在を認
めるなら、僕はどのくらいこっけいに見えるだろうか……………）

ちょうど、見つからない探し物を全く『大ハズレ』で見当違いな
場所に限定して探しているような無力感がシリルを襲った。

ふと、隣の『果実屋』に視線を移す——もちろん、シリルには果

実は『果実』に見えた。手にとってその重さを実感したいほど、見るから新鮮で美しい果実は、シリルが眺めている間だけでも相当な売れ行きである。

淡いグリーンの髪のかわいらしい小女が横の列に割り込む様子をシリルはいつの間にか眺めていた。

その小さな手に真つ赤な果実が握られる。

そして、そのままシリルの横を走り過ぎていった。

「……っ！！ 盗みか？！」

気付いたのはシリルだけのようだった。

時間は何もなかったかのように流れ続け、この街の活気もまた、相も変わらず小女の行為を消し去るだけである。

シリルは小女を追った。

小さい子供のすばしっこさには感服するものの、彼女のなびかせる後ろ髪を追うのは容易なことだった。

ようやく小女が歩き出すのと同じタイミングで、シリルの手が小女の右腕をつかんだ。

「きゃっ！……なっ、何！？」

シリルは、この拒絶反応には少したじろいだ。

……ただ、幸運な反応でもあった。

（まさか、こいつの言葉は……！）

シリルたちを避けるように人が流れていく。

「盗みはいけないな」

「……盗みなんかしてないっちゃ」

シリルは、小女の慌てた口振りに、彼女の清らかさを見た。

「うそをつくな」

「ホントにしてないっちゃけ！」

「……このまま腕を放さないって言ってもか？」

シリルの意図したことは違うように小女には伝わってしまったようだ。

「この人『すけぼー』やけっちゃー!!」

「はあ？ ちゃんとした言葉を話してくれ……」

「すけぼーっちゃー！」

小女が

「すけぼーすけぼー」

とばかり言うので、訳も分からないシリルはお手上げた。た。

行き交う人の中には、シリルを見て同情するように笑いかける人もいた。

次第に見物客のような輪が二人を囲み、シリルの周りからは意味不明な言葉と笑い声が飛び交った。小女は見物客に答えるように「そうつちゃ」

とか

「うちはまだ幼いつちゃ言うけのに」
とか言っている……。

シリルはたまらなく恥ずかしくて、こんなことになるならと自分の正義感を悔いた。

しかし、このことが良い結果をもたらした。

「なっ、何やってんだよシリル!？」

「ああ、アジズ！ ヒナっ!!」

シリルを追いかけていたアジズとヒナとの再会である。

「のん気に見せモンやってんじゃねえよ！ どんなに探したと思っ
てんだよっ」

シリルは肩を落とすしかなかった。

（アジズ……、それは僕を心配しての発言か？ それとも僕に対する『いやみ』か……？）

そんな中、小女の瞳はアジズに釘付けだった。

「か…… かつこいいっちゃ！」

「へっ？」

小女と目が合ったアジズは、思わずいつもの反応をもらした。

「うちがお嫁さんになるっちゃけ」

ニコツと笑う小女と、ひとり見物客の中で立ちすくんでいるシリルを交互に見ながら——ヒナの方には振り向く勇気がなかった——

アジズは混乱していた。

が、何だか見物客を目の前になると、自然と口が開いた。

「ははは、そうだなあー。……君が大きくなったらお嫁さんにしてあげてもいいよっ」

「やったー！ 約束っちゃけねっ！」

「もちろんっ」

周りからは意外にも盛大な拍手が起こった。
皆、アジズの言葉を理解しているようだ……。

シリルにはヘンズさんの言葉が思い出された。

（『以心伝心』……かあ）

宿を見つけたアジズたちは、小さなベッドが横に4つ並んだ『四人部屋』でくつろいでいた。

一行には新たなメンバーが加わっていた——あの小女である。
名前は『サチ』といった。

アジズが

「帰らなくていいの？」と聞くと、サチは
「『歩き商人』っちゃけ家には帰らんのっちゃ」

と、驚くべき事実を語るのだった。

「お前、商人のくせに随分と身軽だなっ」

シリルが、あの時のお礼とばかりに冷たく言う。

「すけぼーに言われたくないっちゃ！」

「だから、『すけぼー』って何だ?? 変な呼び方はやめてくれ…」

…」

「すけぼーっちゃ。アジズもヒナ姉ちゃんも、よく聞くっちゃ。

シリルはうちの腕つかまえて、あんなことやこんなこと考えたっちゃけえ、シリルはスケベですけぼーっちゃ」

シリルは顔を真っ赤にして反論しようとするが、サチには通用しない言葉を連ねたところで、シリルに勝機はなかった。

「で、どうするんだよ。この子を連れて行くのか？」

アジズが、いつも通り、シリルに尋ねた。

「僕は反対だ。今から『砂漠』を抜けなきゃならないんだぞ？ ことにそんな体力があるとは思えない。それに、砂漠には、よく精通した行商人などに付き添ってもらうのが一番だとヘンズさんから聞いている。コイツがそうなら話は別としてだな……」

シリルは言い終わると、妙に確信に満ちた様子でサチをにらんだ。その目は、シリル自身、最も核心に迫ったときに見せる目であり、また、自らの運命を見届けるときの目でもあった。

サチは無邪気に手を高く振りあげた。

「『砂漠』のことなら任せときつちゃ！　うちは何回も往復したところあるっちゃけね、役にも立つっけえ」

「……なにっ！？　それは本当か！？」

シリルの気持ちは急速に揺れ動いた――いや、シリルの気持ちは、もともとサチを連れていくことに賛成だったのだ。

……これはシリルの悪いくせである。

（やはりな……。運命感じるところに真の仲間あり……）

シリルは、アジズとヒナに目をやった。……二人とも、シリルの『許し』を待ち望んでいる。

「……なら、条件付きで仲間にしてやってもいい」

シリルはサチの目を見つめた。サチも負けずと瞳で返してくる。

「……二度と盗みはするなっ。それが条件だ」

シリルは、サチの瞳に負けて顔をそむけながら言った。

サチは

「わかった、すけぼーっ」

と、どこか大人びた笑顔で頷いた。

第十四話：イスゲラードの亡霊

肌寒い夜が訪れても、ソメルシアの街道には多くの人の姿が見られた。

その様子は、三階のアジズたちの部屋の窓から容易に眺めることができた。

夕食後、四人はそれぞれ休憩タイムに入った。

シリルはコートの袖に腕を通し、

「情報収集に行ってくる」

と、一度は気分良く部屋を出たものの、

「忘れ者があつた」

と言ってまた戻ってきた。

あまりに拍子抜けだったので、サチがくすくす笑っていると、シリルが真面目な顔でこちらを見ているのに気が付いて、サチは変に緊張した。

「すけぼーっ、忘れモノとは何それ？」

「サチ、お前だ」

シリルはきつぱりと言い放った。

傍らで聞いていたヒナでさえ顔を真っ赤にし、あのアジズすら冷や汗をかく程のシリルのストレートっぷりであった。

「……か、勘違いするな！ ただ『通訳』が必要なだけだっ」

「すけぼーっ！！ 夜の街にうちを連れ出して何をたくらんどるのっちゃ！ 考えが分かりやす過ぎて困るっちゃけホントに……」

「僕はただ……っ！」

シリルは反論を諦めた。サチと互角以上にやり合うには、もっとサチに慣れるしかない……。

「いいから来いっ」

「なんか言葉づかいワルイっ!!」

シリルは一瞬ためらったが続けた。

「……すみませんが、どうか僕のために一緒にについて来て下さい、サチ様……」

「『よくできました』ってやつっちゃね!」

サチはアジズとヒナに小さく手を振って微笑む。

シリルも大変だなあとthinkながら、アジズは二人を見送った。

部屋の中が急に静かになったので、入れ代わるように外から賑やかな響きが入ってくる。

「はあ……」

アジズはベッドに背を向けて倒れ込み、そのまま天井を見つめた。

「……考えごと?」

アジズの横顔をしばらく眺めていたヒナが言った。

「……いや、何でもないよっ。いつものぼんやり」

アジズはうつろに微笑んでみせた。

ヒナはすぐにでも目の前に置かれた二つのベッドを跳び越し、アジズのベッドの上に行きたいと思ったけれど、そうしたとしてその

後、自分が何をすれば良いのかが分からなくて、ある程度の勇氣に欠けた。

（きつと夜警で疲れてるんだ……）

『せっかく』と焦る一方、『無駄な心配かけてごめんね……』と、半日近く自分を背負って歩いてくれたアジズに対する想いが、ヒナの無邪気な心の邪魔をする……。

「……ヒナ？」

急に呼ばれて、ヒナは戸惑う。

少し間をおいて——ちょうどヒナの心の準備ができた頃になって——アジズは起き上がった。

「暇だし、屋上でも行ってみる？」

「えっ、えっ……うん、行くっ！」

ヒナは些細な感動で胸が一杯だった。

二人は部屋を出て、通路の突き当たりの階段を一段一段足音を揃えて登り、しばらくして屋上へと到り着いた。

別に願ってもなかったのに、そこからの景色はなかなかのものであった。

「うわぁ……っ、街の明かりがキレイ……！」

「……本当だな、来てよかった」

アジズはほっとしたような落ち着きの中で、笑顔でヒナに応えた。どうやら、二人がいる場所は街でも有数の高い場所に数えられるようだ。

ふとアジズは一瞬寒気を感じて身震いした。
どこか不気味だった。

隣に目をやったアジズはすぐにヒナの異常に気が付いた。
「寒いかな？」

「……………」

ヒナの言葉は言葉にならなかった。

ヒナは目を閉じ、全神経を集中して、再び言葉を絞り出そうと試みる。

しかし、そうして出てくるのは吐息まじりのかすれた声で、聞き取るに困難なものばかりだったけれど、アジズはそれに必死に耳を傾けた。

「……………逃げよう……………」

「逃げよう？ 当たってたら頷いて」

ヒナの声をアジズが感覚で解読する。

ヒナは今にも泣きそうな目で何度も小さく頷いた。

アジズは急な事で驚きが隠せなかった。

「……………とりあえず部屋に……………なっ！？」

アジズは目を疑った。

階段に通じる扉の前に、浮遊している白い人影を見たのだ。それはアジズが初めて目にするものだった。

次第にその影は輪郭をはっきりとさせ、ボロ絹を着た男の姿に変わった。

《……………見つけたぞ、ヒナ……………》

前後、左右、上下、あらゆる方向から二人の脳裏に侵入し、響き渡る男の声——その残響で頭がいかれてしまいそうな程の圧迫感が二人を襲う。

アジズは一瞬、声の主を探した。

というのも、男の声のように思われる『暗号』が、耳に伝わるものではなかったからだ。

男の顔を眺めるに、口元は大胆に巻かれたスカーフのような衣服の一部に隠され、また、その目元は白い包帯らしきもので覆われていて定かではない。

ただし、隙間から見せる両眼は、限りなく闇に近い色をしていて、左眼の瞳のわずか中心だけが白光を発するかのように輝いている。

「……ヒナに用か？」

アジズは抱きしめるようにしてヒナを引き寄せた。

ヒナはアジズの胸の中で、だいぶ落ち着きを取り戻したようだった。

《……ほほう、お前にその子が守れるか？》

「はあ？ 守れるかって？ どういう意味だよ」

《フンツ……文字通りだ。お前にヒナが守りきれるかどうかが聞いているのだ》

男は左眼の瞳の白光を強くさせながらアジズを煽った。

アジズの身体が微かに震えているのを心配したヒナがアジズの顔を見上げる。

「だい……じょうぶ？」

ヒナの言葉にアジズは何も答えなかった——答えられなかった。

そこには迷いに満ちたアジズの表情があった。

「……何からヒナを守ればいい……?」
アジズが男に尋ねた。

《それはお前が考えることだ》
男は静かに言う。

「……なぜ、オレにヒナを守るかなんて問いかける? あんたはヒナの命でも狙っているのか?」

《さて、どうか》
男は威厳あるその声の調子を少し緩めた。

《……それはそうと、お前は決心に欠けるようだ。心のどこかでヒナを守りきれないかも知れないと感じている……。だが、その迷いは、当然抱くであろう感情だ。誰もが最初から迷いを振り払うことなどできないからな》

「何が言いたい……」

《大事なものは少しでも迷いを消す努力だ。……そうだな、——3日後の夜、また訪れる》

男はそう言うと、次第に元の人影へと姿を変えていく。

「待てよっ! 一体何モンなんだよ」
アジズが慌てて叫ぶ。

ヒナも薄れてゆく男に注目する。

《……ハハハ、『イスグラードの亡霊』とでも言っておこうか。さ

らば、ヒナに心許される男……」

男は完全に闇夜にとけて消えた。しかし、言葉だけは夜空を漂った。

《迷いが消えないようならば裁きがある、と心得るんだな……》

夜も深まって、ようやくシリルとサチは宿に帰ってきた。

「ふうー、なかなか有益な情報が集まったぞ。この大陸のことも大理解できたみたいだ」

シリルは満足の笑みを浮かべながら部屋の扉を開けた。サチもすぐ後ろでシリルに続く。

「あつ、アジズもヒナ姉ちゃんも寝てるみたい……。静かにせんといけんっちゃ」

サチが扉をそつと閉めながら、コートを脱ぐシリルに言った。

「戻ってくるのが遅すぎたんだ。……僕たちも早く寝るとしよう。明日からはいよいよ『砂漠』ルートだからな」

第十四話：イスゲラードの亡霊（後書き）

更新が遅いです…。ストーリーは決まってるんですけど「何を伝えたいの？」って話になって。今、それを模索中です。数少ない読者さん、すいません…。気分転換に短編とか書いた方がいいかなあとしばらくこの小説を放棄することになりますが、更新ができた際には「懐かしいな、ププッ」とか思っただけでも読者さんには嬉しいです。この小説に少しでも目を通してくれた読者さんに感謝です。

第十五話：遺跡と白髪の男

太陽の光が、熱が、なにも遮るものなしに地表に届き、焦がすような感覚——四人は『砂漠』の中を果敢に進んでいた。もうソメルシアを出て三日目になる。

「みんな大丈夫？　うちは慣れとるけいいっちゃけに……って、すけぼーが倒れとるっちゃ！」

先頭を歩いていたサチが振り向き様に砂に埋もれたシリルを発見。アジズとヒナが気付いていなかっただけに、この発見は大きかった。

「すけぼー、しっかりするっちゃ」

「……みつ、水う……」

サチはシリルに水を飲ませようと、シリルの首にかかっていた水筒に手を取った。しかし、水筒は異常に軽かった。

「もう全部飲んだっちゃけ？　ほら、……うちの水あげるっちゃけね、元気だすっちゃ」

二人のやりとりをアジズは見物する。

ふと気付けば、あの夜から三日目になる。確かに鮮明に覚えている男の姿。しかし、あの夜の出来事は夢だったのだと言われたら、多少納得できてしまう所もある。

……確実にあれは幻だったんだ、そう思えたなら、アジズの胸の内はどんなにすっきりするだろうか。

「……最近、ぼんやり多いねっ」

ヒナが、焦点を失っていたアジズに声をかける。
その声は後ろからアジズを抱きしめた。

「……まあね」

「『迷い』でしょ？」

アジズは息をのんだ。

ヒナにその言葉を言われるのだけは避けたかった。

この砂漠のルートに入ってから、一行を襲う魔物は跡を絶たない。小さいが毒を持ち、集団で襲ってくる灰サソリの『シユリングレイ』、乾燥したゴムのような皮膚で覆われた鳥獣の『ビートクル』など、めったにお目にかかれないはずの生態系が四人の前に姿を現す。

その度にアジズは仲間を——ヒナを——守ろうと奮闘したのだった。

「……なんか恰好がつかないよな」

アジズはこぼした。ヒナはアジズの意外な一面を見た気がした。

「アジズは結構カッコ良さとか気にするんだね」

「いや、その、別に……、今回はかりは何となく決まりが悪いって言うか……ヒナに悪いなって」

アジズはそう言うと、回復したシリルのもとへ歩いて行った。

広大な黄土色の上で、青空の下の仲良し二人とその間で笑っているサチを眺めるヒナがいた。

砂漠にもそろそろ夜が訪れるらしい。太陽が赤く染まりながら、遥か彼方の地平線に腰を下ろしている。

「おい、サチ……、今日はどこかで野宿でもするつもりか？ 例の

『歩き商人の宿場』が見当たらないぞ。ルートを間違ったんじゃないのか……?」

氣力が限界のシリルが尋ねた。サチの肩がびくりと動く。

「その代わり、あっちの方に『変なの』が見えるっちゃけ……」

「確かに、多少は砂塵を防げそうだが……んっ? 待て、あそこに人がいるぞ」

シリルの指指した場所に白髪の男が立っていた。どうやら、サチの言う『変なの』に興味があるようだ。崩れた壁や柱に手を触れ、その神秘的な輝きに魅せられている。

四人は男に近づき、一人走り出したサチが声をかけた。

「何してるっちゃ、お兄さんっ」

男は振り向いて声の主を探した。そして、背の低いサチに気が付いて優しく微笑んだ。

「お兄さんかぁ。こう見えてもわたしは五十歳になるおじさんだよ、かわいい子ちゃん。それで、今はね、『発掘』っていうお仕事なんだよ」

「へえっつ、発掘っ」

遅れてきた三人が合流する。

「何をなさっているんですか?」

シリルが尋ねた。

「ああ、発掘です。この遺跡は長いこと砂に覆われてましてね、最近発掘を始めたばかりのものなんですよ」

「お兄さん一人で頑張つとる訳？ 大変っちゃね」 サチがなぜか頷きながら言った。

「そんな訳ないだろっ」

シリルが静かに怒鳴る。男は思わず苦笑した。

「ハハハ、一人じゃきついね、さすがに。仲間は今こうでテント張って休んでるんだよ。……ああ、もうだいぶ暗くなってきたね。君たちは大丈夫なのかい？ あれだったら、わたしたちのテントに来なさいな」

四人は顔を見合わせた。思わず笑みがこぼれた。

「自己紹介しておくよ。わたしはケーリー。……さあ、少し距離があるから急ごうっ」

一行は遺跡に沿って歩き始めた。白髪を先頭に、藍と淡緑、赤と純黒のペアが続く。

ヒナはアジズを横からさりげなく見つめていた。その視線に気付いたのか、アジズはちらつとヒナに目をやった。

「……どうした？」

急にあたふたと視線をそらすヒナにアジズが問いかける。
ヒナは震える息を整えた。

「……手、握ってもいい？」

アジズは

「へっ？」という顔をして応じた。

手を握ることに何か意味があるのだろうかと思議でたまらない。

ヒナはその様子を見て、どこかへ恥ずかしさが飛んで行ったらしい。

「だって、アジズのことを心配なんだもん……」

「な、何が心配なんだよ。オレは大丈夫だから」

アジズは言葉に多くの『トゲ』を含ませた。意図的ではなかった。でも、そうするしかなかった。

「……ごめんね」

ヒナは自分の無邪気を悔いた。

「アジズがみんなを守ろうとして傷ついていくから、わたし、我慢できなくて……」

アジズはこれ以上ヒナを見つめていられなくなって足元に視界を落とした。

「……オレは傷ついてもいいんだ。それ以上に傷つけない仲間がいるから」

アジズはそう言うのと黙り込んだ。サチとケーリー氏の笑い声が前方から垂れ流れてくる。

シ ril は、アジズとヒナの組が先頭集団からだいぶ距離をとっているのを心配しつつも、重い足を砂に埋めながら進んでいく。

突然、ヒナがアジズの手をとった。二人の目がきれいに合った。

「……ほら、こんなに冷たいよ?」

ヒナは温めていた両手で優しくさすった。
面食らったアジズは、不意を衝かれたこと以上に、そのヒナの『ぬくもり』に驚いた。

「ああ、ありがとう……って、何言ってるんだろオレ……」

アジズは動揺を隠せないでいる。ヒナはアジズが何かを少し取り戻した気がして嬉しかった。

「一人で頑張るの良くない……」

「……まあね、一応わかってるつもりだよ」

二人は微笑んだ。

その時だった。

「きゃあっ!」

二人を唐突な砂塵が襲った。凄まじい風が砂漠を駆け抜ける。

「……急だな、おい」

その風は渦を巻いて二人を取り込んだ。前方のシリルたちは異変にすぐに気が付いた。

サチは、二人が砂の壁で消されていくのを黙って見てはいられなかった。

「アジズっ! ヒナ姉ちゃんっ!」

サチは無謀にも二人に近づこうとしたため、たちまち砂の刃に全

身を切り付けられた。

「サチ、よせ！ あれは異常だ！ 近づく馬鹿がどこにいるんだ！」

「だって、すけぼーっ！」

サチは涙目だ。シリルは焦った。

「二人は大丈夫かも知れない」

ケーリー氏は妙に落ち着いていた。

「この気象現象はどこか神懸かっている。そんな気がしてならない。……ほら、砂塵は二人を護るかのように渦を巻いてじっと留まっている。きっと中心部はそれほどでもないはずさ」

サチは少し勇気づけられたようだった。

「わたしたちは何もできないよ。といって、ここにいるのも危険だ。テントは遺跡で見えないけれどあの壁の向こうにある。先ずは避難しよう」

無難な決断に従い、三人はテントを目指した。急に起こった砂塵に、二人の生還を裏付ける不思議な力を感じながら。

第十五話：遺跡と白髪の子（後書き）

ただ今、受験勉強シーズンにより時間が…。可能な限り更新できたらと思つてます。度々ですが…、数少ない読者さん（お決まり？）
本当に感謝です！

第十六話：アジズの行方

目的地に着いた三人の前には、あまりに寝静まり返った多くの三角テントがあった。

シリルは人影がないことに多少の不気味さを感じ、ケーリーさんは人気がないことに薄暗い恐怖を覚えたようだった。

そんな中、サチはひとり後ろを振り返り、目を細めた。

アジズたちを襲った砂塵は、ここから眺めると、やけに遠くにあるように見えた。

それに、近くにいたときに体感したあの唸るような轟音は、不思議とおとなしく黙しているように感じられた。

まるで世界が切り離されているようだ……。

サチは自分の小さな胸の中が不安で満たされていくのを感じた。

「変だ、誰もいない」

テントの中を一つ一つ覗いて回っていたケーリーさんは、この妙な事態を前に幾分落ち着いていた——どこかの神を崇めるような目をしている。

「……僕たちは、これからどうすれば良いのでしょうか」

シリルの問いに、ケーリーさんは我に返ったように振り返った。

「君はだいぶ疲れているようだよ。少し休みなさい」

「しかし、二人が……」

「夜の砂漠は昼間以上に危険なんだ。二人を助けたいなら、動ける場面で動けるようであればね」

シリルはそのままテントに誘導された。サチもそれに続いた。砂塵は依然として、天をねじるかのごとく渦を巻いていた。

自然はいつでも人の上を行く。

たとえ人が自然をコントロールできるようになったとしても、それだけは変わらないのかも知れない。

今、本当に自然と時を共にしている気がする。人と自然という二元対立を越えて。

アジズは、切り取られた夜空の月を見上げながら思った。

砂と風の壁は天高くまっすぐと伸び、夜の訪れと共に輝きを増した月アカリをちょうど円形に切り抜いていた。

アジズはヒナを呼んだ。左隅の視界で、ヒナはずっと泣いていたらしい。……なぜだろう、思い出せない。今さっきまで何が起きていたのか、なぜヒナが泣いていたのか。

それに……、何か“世界”が狭くなった気がする。

アジズは、右手をそつと眼前で揺らしてみた。そして、そのまま力なく振り落とした。

「今、やっとわかった」

「……えっ？」

ヒナはアジズを覗き込んだ。アジズは表情を変えずに続けた。

「……それに、思い出した。オレは『裁き』を受けたんだったな」
アジズはヒナの顔を見た途端に、その記憶を取り戻したようだっ

た。

「……何だか、急に訳がわからなくなった。今は楽になりたい」
アジズはそう言っていると、静かにヒナを抱きしめた。
ヒナは思わず声を上げてしまいそうになったが、かろうじて踏み止まった。

何とかヒナは、至福のときを迎え入れることに成功したのだ。

どうしてアジズが自分を抱いてくれているのか、ヒナは知りたくてたまらなかった。

自分を抱けば、アジズは楽になれるのだろうか。もしそうなら、もっと……、いや、ダメだ、中毒になってしまう！

そんな考えがヒナの頭の中で延々と繰り返されていた。確かに、毎回この調子では体も心も持ちそうにない。

もしかしたら、アジズの単なる衝動かも知れない。しかし、いつもならヒナを受けとめてあげるだけのアジズが、今回ばかりは違ったのだ。

(……きつと何か意味があるんだよねっ……)

月アカリが二人をそって照らしていた。

翌朝、一番に目を覚ましたのはサチだった。

「すけぼーっ」

胸元を揺すられたシリルは、まだ疲れが残っているせいか反応が鈍く、差し込んできた太陽の光を確認するまで随分と時間がかかった。

た。

二人は早速、外へと飛び出した。そこには、目の下に隈をつくったケーリーさんと衰弱しきったヒナの姿があった。

「ヒナ姉ちゃんっ!」

「ヒナっ、無事だったのか!」

二人は思わず歓喜の声を上げた。そして、ようやく事態を把握した。

「アジズは……っ」

「……残念だけど、もう一人の姿はなかったよ。もしかしたら、まだ砂漠の下に埋もれてるかも知れない。が、しかし……」

ケーリーさんは無念の表情を浮かべていたが、その瞳にほんの少し光を取り戻したようだった。

「しかしね、この子がそれは無いと言うんだ」 三人の視線がヒナに集まった。

「ヒナ、どういうことだ?」

シリルは慌てて問い質した。ヒナは、言葉を探すように足元を見て黙っていたが、しばらくして、その口を開いた。

「私が、大丈夫だったから……」

ヒナは静かに続けた。

「……それにねっ、私、アジズが『ウイズダム』に向かつてる夢を見たの……。何だか、ただの夢じゃない気がして……」

「ウイズダム? 次の目的地か……」

シリルは頭の中の地図と相談した。

「ここから半日……ってとこか。果たして、アジズが案内人もなしに街まで辿り着くなんて可能性があるのか……」

その顔には、絶望にも似た感情が表れていた。しかし、一行の心の内は、なぜか——面白いことに——みな同じであった。

「……ウイズダムに向かおう」

シリルは決断した。

「私も一緒に行こう。仲間が消えてしまった今、街に戻る他ない」

ケーリーさんは、遺跡を見つめながら、しばしの別れを惜しんでいるようだった。

「ウチはヒナ姉ちゃんの夢を信じるっちゃけ」

早速の出発を目前に、サチはヒナにささやいた。その無邪気さを前に、今のヒナには微笑んであげることしかできなかった。

四人は、次第に高くなってきた太陽の下、アジズとの再会を願いつつ、遺跡の発掘テント群を後にした。

第十六話：アジズの行方（後書き）

更新がダメダメで、ほんとダメ作者ですね…。《頑張って最後まで書くぞー！》《おーっ！！》

第十七話：夕闇

何ともカラフルな建造物の応酬に、シリルは世界感を失いそうになった。

子供たちが楽しそうに街中を駆け回り、ソメルシアとはまた違う賑わいを見せている。

一行は『ウイズダム』に到着し、ケーリーさんのいう『秘密の場所』を目指していた。

研究が盛んな都市だと聞いていたはずだが、と首をかしげるシリルをよそに、先導するケーリーさんは人気のない街中の雑木林をずんずんと進んで行く。

そして、大木の前で立ち止まった。

「ここは一応、『秘密の場所』だから、誰にも言わないでくれよ？」

ケーリーさんは微笑みながら、大木にすつと手を伸ばした。

ヒナはその指先を、サチは大木を見つめていた。

一瞬の出来事だった。

一行の前に扉が浮かび上がったのだ——というのも、上手くカムフラージュされていた扉をケーリーさんが引き開けたからだ。

「階段だ！ 地下に何かあるんですね!？」

シリルは興奮のあまり叫んだ。

サチなんかヒナに抱きついて喜んでいる。

「若いものは分かりやすいねえ」

ケリーさんは大層嬉しそうに三人を誘導した。

足音が妙に落ち着きもなく続く。

階段を降りた先には、雲の上に出たかのような世界が待っていた。

「地下研究施設『ミール』へようこそ」

三人は二、三步進むと足を止めた。ケリーさんだけが床を蹴り続ける。

地下とは思えないほどの大空間を包むのは、自ら光り輝く銀白色の壁。

縦横にいくつもの通路が長く続き、その規模は計り知れない。

ふと、ヒナは寒気を感じて周囲を見回した。慌ただしく白衣の人々が視界を横切っていく……。

「空き部屋がある。そこを利用するといい」

再びケリーさんが案内を開始、凄まじいロケットスタートを切った。

途中、ケリーさんがいろいろと施設のことを話すのだが、一番真剣に聞いているのは、やはりシリルだった。

「……なるほど。地下は大規模な研究施設、地上はその研究成果を世に供給する教育機関、二つは密接に関係しているんですね!」

「裏の世界と表の世界を融合した先進社会システム。教育に関しては、ウィズダムに委ねられた世界的義務とも言えるね」

二人の会話の余韻が消えないまま、一行は部屋の前に到着した。

「私は隣の部屋で作業しているから、何かあったら声をかけなさい」

「は、はいっ……ありがとうございます」
シリルはすっかり自分たちの『運命』というものに惚れ込んでいた。

三人は取り敢えず部屋に入った。ちょうど3つベッドが置かれてあり、寝泊まりには困りそうにない。

「さて、どうするべきか……」
シリルは腕を組んだ。

「アジズ探すっちゃ」
シリルのコートをサチが引つ張った。

「分かってる。問題はどっやって探すかだ」
「うちが聞き込みするっちゃけ！」
「……まあ、妥当だな。当分はそれでいこう。ヒナも聞き込みを頼む」

三人のアジズ大搜索が始まろうとしていた。

あっという間に六日が過ぎた。有力な情報はまだ少ない。
図書館でそれらしき人物をよく見かけるといふ情報もあったが、シリルは
「人違いだろう」と妙な確信を持って切り捨てた。

「時間だけが過ぎていく……」

夕日の赤橙色を背に浴びながら、シリルは階段に腰を下ろした。
時間は休むことを知らないのだろうか。そうだとしたら、大変な働き者だ。

そもそも、時間なんて確かなようで曖昧なものだ。

気づいた頃には流れてしまっているのだから、その働き様を疑われても仕方がない。

きっと時間のやつも、上司の目を欺きながら、上手くやっているのだろう。何とも巧みに。

（この大陸にきて、こんなにいい時間を過ごせているのも、アジズ、お前のおかげなんだぞ）

シリルは振り向き、夕闇が街を襲う様子をしばらく眺めていた。

第十七話：夕闇（後書き）

《最後まで頑張るんだ！》 《おーっ！！》

第十八話：赤髪の先生

シリルはヒナの異変に気付いていなかった。

いや、本当のところは気付いていたのだが、ただ緊張しているだけだろうと思っていた。

「ここがA－1クラスか……」

シリルが扉に手を伸ばす。ヒナはそれを見て、一瞬息が止まったかのような顔をした。

シリルは横目でヒナを監視していたらしく、異変には気付くが手を止めようとはしない。

「大丈夫か？」

「……けちゃだめっ！」

「ん？」 ヒナの小さな声にはいつも悩まされる。

だが、ヒナの願いはシリルに届いた。

（このヒナのただならぬ様子は何を意味しているんだ……）

二人は『学校』にいた。シリルは学校の教師としてケーリーさんに推薦されたのである。

何も役立てずにミールに居留まるのが苦だったシリルはすぐに承諾した。

ヒナは助手とでも言えがいいのだろうか、なぜかシリルの付き添いを申し出たのである。

シリルは、言葉の壁が生じた場合の緊急事態を考慮し、ヒナを連れていくことに決めた。

君は古典学に精通しているからね、というケーリーさんの一言がきっかけだった。

もちろん、アジズの搜索は出来る範囲だが続行している。

「緊張してるのか？」

「……教室の中から感じる……」

「な、何をだっ?!」

「わからない……」

ヒナは

「ただ」と付け加えた。

「ただ、アジズじゃない」

「……そうか」

シリルには、ヒナに不思議な能力がそなわっているように思えてならない。

未だ、ヒナのことはよくわからない。

アジズなら、自分よりもヒナのことを知っているのだろうかと思う。

「それに……まだ授業中……」

ヒナがボソツとつぶやいた。しかし、これは言うのが少し遅かった。

——ガラガラ……——

教壇には赤い髪の男が立っていた。

（なっ——アジズ!？）

シリルは目を疑った。しかし、ヒナの前言が頭によぎる。すぐに男と目が合った。

「ああ、すみません。授業を長引かせてしまって」

男は丁寧なそう言つと、軽くお辞儀をした。

「来週はこの続きから」

男の声はどこかアジズに似ている。シリルはますます混乱した。

「あの……お名前はっ？」

すれ違う瞬間に、シリルはようやく我に返った。

「ん？」

しばらくの間、男は見慣れない顔を見たというような表情をした。

「ああ、初めましてシリル先生」

男の笑顔は初めて見た気がしない。

「アジズです。宜しくお願いします」

この言葉にどれだけの悪意があるかは知らない。

いや、そんなものあるはずがないのだが、嘘なら嘘と言ってほしい、それが正直な感想というものだろう。

シリルは、ヒナの奮えが治まらないのが気がかりだった。

（アジズじゃないならこいつは誰なんだ……。ヒナはこの男から何を感じているんだ?!）

僕は、とシリルが遠ざかる男に宣戦布告を始めた。

「僕はあなたを知っています。全く知らないと言えば嘘になります」

男は立ち止まり、純粹にいぶかし気な表情でシリルに応えた。

「この後、ゆっくり話をさせてくれませんか？　きっとあなたは、僕たちの捜している人だ」

男は少し考えて言った。

「はい、では南図書館でお会いしましょう。私はいつもそこにいますので」

だいたいの筋道は立ったというものだろう。

第十八話：赤髪の先生（後書き）

一年以上のブランクです（泣）：ただただ忙しかったとしか言えません、時間を見つけて、駄文を書ける範囲で書いていきたいと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1580a/>

夕闇の彼方へ

2010年10月11日20時44分発行